秋田県文化財調査報告書第246集

曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

―― 中 山 遺 跡 ――

1994・3

秋 田 県 教 育 委 員 会

曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

―― 中山遺跡(なかやまいせき) ――

1994・3

秋田県教育委員会

序

本県には、先人の残した多くの文化財があります。これらの文化遺産は、現代に生きるわたしたちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど、秋田県農政部北秋田農林事務所により曲田地区農免農道が計画されました。この路線の一部が中山遺跡を通過することになり、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代後期の竪穴住居跡とともに掘立柱建物跡が発見され、当時の集落の中に占める住居と掘立柱建物との関係があらためて問題となりました。

本書は、この成果をまとめたものでありますが、文化財に対するご理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでご指導、ご協力下さった秋田県農政部北秋田農林事務所、大館市教育委員会ならびに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

秋田県教育委員会
教育長　橋本顕信

例　　言

1．本報告書は、曲田地区農免農道整備事業に係る中山遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は、長澤和則の協力を得て、小畑　巌が行った。

3．付編「学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書」は、学習院大学年代測定室に依頼した分析結果報告書である。

4．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の２万５千分の１「扇田」・「十二所」（第３図）である。

5．土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』によった。

6．方位は磁北である。真北は、磁北から東に５度27分36秒の方角にあたる。

7．本書の作成にあたって、次の方々からご指導・ご助言を賜った。記して謝意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

板橋範芳　　藤井安正

凡　　例

1．実測図の縮尺は、遺構図面が１／40又は１／60で掲載し、遺物の実測図は１／２又は１／３で掲載したが、不定縮尺のものもある。

2．各遺構に付している略記号は、次のとおりである。

ＳＢ（掘立柱建物跡）　ＳＤ（溝状遺構）　ＳＩ（竪穴住居跡）　ＳＫ（土坑）
ＳＫＦ（フラスコ状土坑）　ＳＺ（立石遺構）　Ｐ（柱穴）

3．各遺構に付している番号は、遺構の種類に関係なく１番から通し番号とした。ただし、柱穴の番号は101番から付している（竪穴住居跡の柱穴は除く）。

4．挿図中の記号・シンボルマーク・スクリーントーンは、以下のとおりである。

焼　土　　貼　床　　●土　器

目　　次

序
例言・凡例
目次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至るまで…… 1
　第２節　調査の組織と構成…… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 3
　第１節　自然的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 4
第３章　発掘調査の概要…… 7
　第１節　遺跡の概観…… 7
　第２節　調査の方法…… 7
　　１．調査区の設定
　　２．発掘調査方法
　第３節　調査経過…… 8
第４章　調査の記録…… 11
　第１節　遺跡の基本土層…… 11
　第２節　検出遺構と出土遺物…… 12
　　１．縄文時代
　　２．時期不明
　第３節　遺構外出土遺物…… 47
第５章　まとめ…… 65
付編　…… 66

挿　図　目　次

第１図　遺跡所在地図…… 1
第２図　地形区分図…… 3
第３図　周辺遺跡地図…… 5
第４図　調査区周辺地図…… 7
第５図　遺構配置図…… 10
第６図　基本土層図…… 11

第７図　ＳＢ33掘立柱建物跡実測図…… 13・14
第８図　ＳＩ01竪穴住居跡石囲炉実測図…… 16
第９図　ＳＩ01竪穴住居跡実測図…… 17・18
第10図　ＳＩ03竪穴住居跡実測図…… 19
第11図　ＳＩ04竪穴住居跡実測図…… 20
第12図　ＳＩ04竪穴住居跡遺物出土状況図…… 21
第13図　ＳＩ15竪穴住居跡実測図…… 23・24
第14図　ＳＩ15竪穴住居跡地床炉実測図…… 25
第15図　ＳＩ16竪穴住居跡実測図…… 26
第16図　ＳＩ16竪穴住居跡遺物出土状況図…… 27
第17図　ＳＩ17竪穴住居跡実測図…… 29・30
第18図　ＳＺ14立石遺構実測図…… 31
第19図　ＳＫ07・ＳＫ08・ＳＫ09土坑実測図…… 33
第20図　ＳＫ10・ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ34土坑実測図…… 34
第21図　ＳＫ36・ＳＫ37・ＳＫ38・ＳＫ19・ＳＫ21土坑実測図…… 37
第22図　ＳＫ22・ＳＫ23・ＳＫ24・ＳＫ25・ＳＫ26・ＳＫ27土坑実測図…… 40
第23図　ＳＫ28・ＳＫ30・ＳＫＦ35・ＳＫ39・ＳＫ40・ＳＫ42土坑実測図…… 43
第24図　ＳＤ18溝状遺構実測図…… 45・46
第25図　遺構内出土土器（１）…… 48
第26図　遺構内出土土器（２）…… 49
第27図　遺構内出土土器（３）…… 50
第28図　遺構内出土土器（４）…… 51
第29図　遺構内出土土器（５）…… 52
第30図　遺構内出土石器（１）…… 53
第31図　遺構内出土石器（２）…… 54
第32図　遺構外出土土器（１）…… 56
第33図　遺構外出土土器（２）…… 57
第34図　遺構外出土土器（３）…… 58
第35図　遺構外出土土器（４）…… 59
第36図　遺構外出土土器（５）…… 60
第37図　遺構外出土土器（６）…… 61
第38図　遺構外出土石器（１）…… 62
第39図　遺構外出土石器（２）…… 63
第40図　遺構外出土石器（３）…… 64

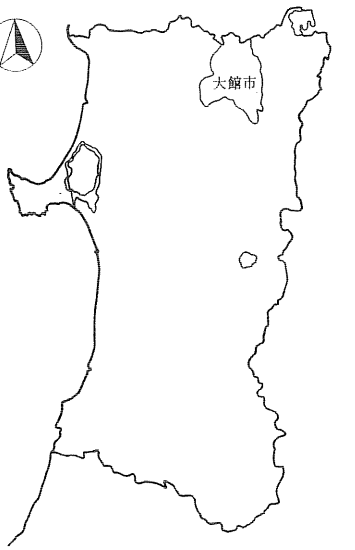
第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

曲田地区農免農道は、昭和63年、県農政部北秋田農林事務所により計画されたものである。この農道は、大館市曲田・中山両地区において生産される農産物の搬出路を整備し、農業の合理化に寄与することを目的としている。計画路線は、曲田字沢口から中山字兎沢に至る全長3.3kmである。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、北秋田農林事務所は、文化財保護法に基づき秋田県教育委員会に調査の依頼を行った。これを受けて秋田県教育委員会は、平成元年度から同３年度にかけて遺跡分布調査を行い、その結果、周知の遺跡３カ所（野沢岱、冷水山根、寒沢）、新発見の遺跡４カ所（家ノ後、上聖、寒沢Ⅱ、中山）が路線上に分布することが判明した。

この遺跡分布調査の結果に基づき、平成２年度から同４年度にかけて遺跡範囲確認調査を行い、計画路線上での遺跡の広がり及び遺跡の性格の把握に努めた。



第１図　遺跡所在地図

遺跡の保存について協議の結果、工事による遺跡の消滅が避けられないとして、緊急発掘調査を行い記録保存の措置をとることで合意し、平成３年度に上聖遺跡・家ノ後遺跡、平成４年度に野沢岱遺跡の発掘調査が実施された。そして、平成５年度に冷水山根遺跡、寒沢Ⅱ遺跡に続いて中山遺跡の発掘調査が実施されたのである。

第２節　調査の組織と構成

所　在　地	秋田県大館市中山字中山31－１
遺跡略号	２ＮＹ
調査期間	平成５年９月１日～平成５年10月22日
調査面積	８００㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	小畑　　巌（秋田県埋蔵文化財センター調査課学芸主事）

	長澤　和則（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員）
総務担当者	佐々木　真（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
	佐藤　広文（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	秋田県農政部北秋田農林事務所　大館市教育委員会

（参考文献）

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』（平成２年）　秋田県文化財調査報告書第201集　1990

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』（平成３年）　秋田県文化財調査報告書第217集　1991

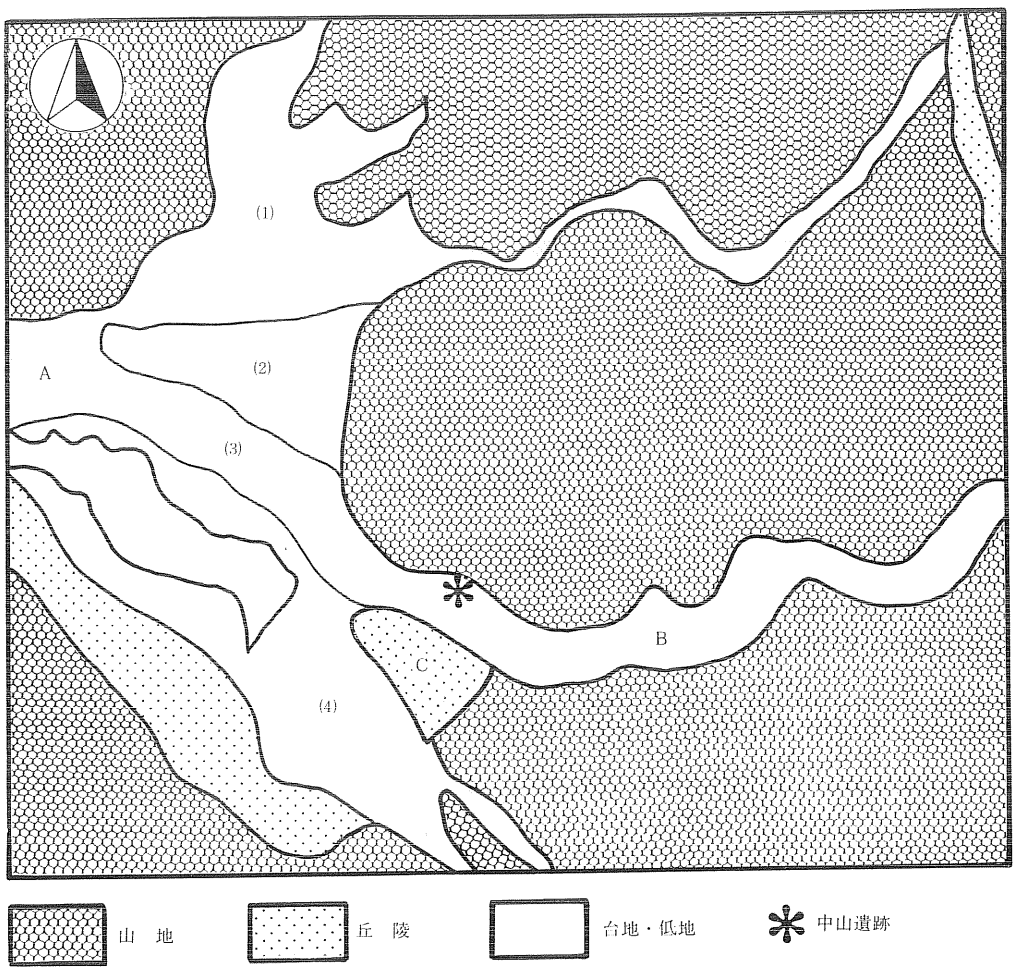
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』（平成４年）　秋田県文化財調査報告書第226集　1992

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』（平成５年）　秋田県文化財調査報告書第239集　1993

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境（第２図）

米代川は、秋田県の北部を西に流れ、日本海に注いでいる。その川筋にはいくつかの低地が形成されている。西から東へ米代川を遡って行くと、河口付近には能代平野、小猿部川との合



A　大　館　盆　地　〔(1) 長木川・下内川低地　(2) 大館段丘地
(3) 米　代　川　低　地　(4) 犀川・引欠川低地〕

B　十二所先行谷低地

C　味 噌 内 丘 陵 地

第２図　地　形　区　分　図

流部に鷹巣盆地、そして長木川との合流部に大館盆地がある。

大館盆地は、北から順に長木川・下内川低地、大館丘陵地、米代川低地、犀川・引欠川低地からなっている。米代川低地は、米代川の川筋に沿って盆地内をほぼ東西方向に発達し、盆地の東縁で十二所先行谷低地へと移行して行く。低地は、この十二所先行谷低地へと移行するあたりで、北からの山地と南からの味噌内丘陵地とにちょうど挟まれた格好になる。このあたりの米代川右岸には、段丘地形が認められ、遺跡はこの段丘上に立地している。

大館盆地内の段丘は、４ないし５段に分けられているが、段丘間の段差が不明瞭であることから単純ではない。ここでは、高・中・低位の３大別している『土地分類基本調査　大館　地形分類図』に従うこととする。これによると、遺跡のある段丘は、中位段丘に相当する。なお、各段丘の海抜高度は、おおむね高位段丘100m前後、中位段丘60～100m、下位段丘45～70mである。

遺跡の北方には、高森、鳳凰山等の海抜500m以上の山々があり、黒鉱鉱床の開発、秋田杉の植栽等の開発が行われている。一方、遺跡の南にある味噌内丘陵地は、海抜100～140mの高位段丘であり、現在はゴルフ場として開発されている。

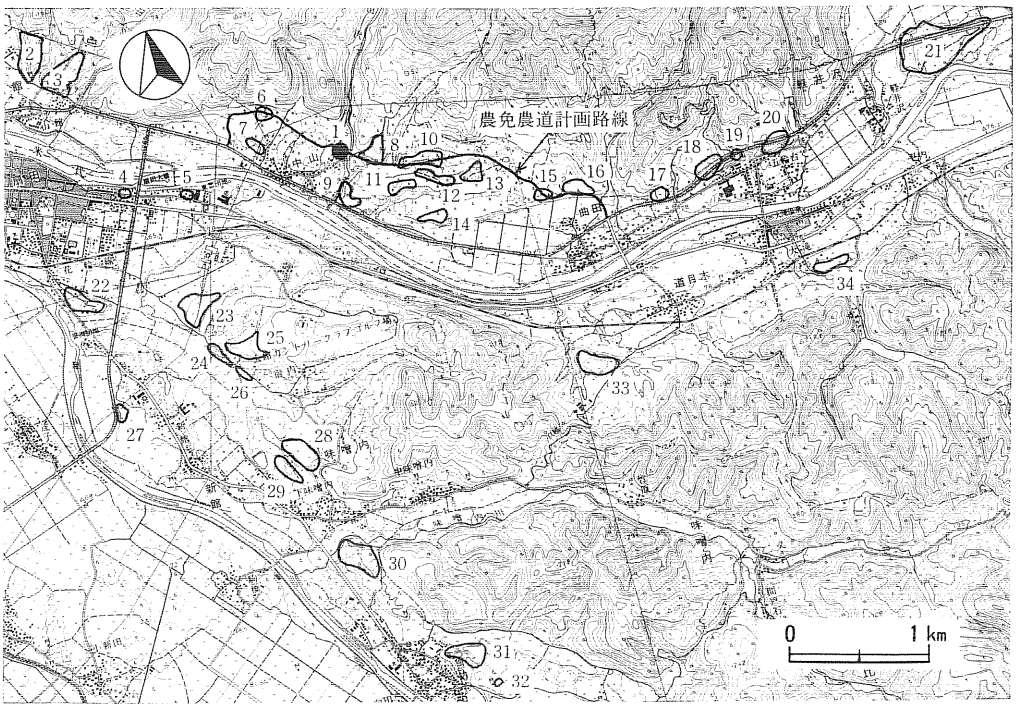
第２節　歴史的環境（第３図、第１表）

第３図周辺遺跡地図は、中山遺跡の周辺、東西約７km、南北約５kmについて掲載したものである。各遺跡は、米代川及び犀川により形成された河岸段丘上に立地している。

図幅内の遺跡の時期を概観すると、旧石器時代遺跡は見あたらない。先人がその足跡を印すのは、縄文時代早期になってからである。その後、縄文時代晩期まで場所を変えて生活の痕跡

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期又は出土遺物	番号	遺跡名	時期又は出土遺物
1	中山	縄文（中・後）	18	鳶ケ長根Ⅱ	縄文（晩）
2	山館	土師器、中世陶磁器	19	鳶ケ長根Ⅲ	縄文（晩）
3	山館上ノ山	縄文(前・中・後・晩)、平安	20	鳶ケ長根Ⅳ	縄文(早・前・後・晩)、弥生
4	市川		21	萩峠	縄文（前・後）
5	本道端	縄文（早・前・中・晩）	22	長岡城	中世
6	兎沢	縄文土器	23	大岱	縄文(前)、土師器
7	竜毛岱	縄文(中・後)、須恵器	24	横沢	縄文(早・中・後)、平安
8	寒沢	縄文（前・中・後）	25	横沢	土師器
9	野沢岱Ⅰ	縄文（前）	26	袖ノ沢	平安
10	冷水山根	縄文（早・前・中・後）	27	真館	土師器、須恵器
11	野沢岱Ⅱ	縄文（中）	28	宿内中岱	縄文（前・後）
12	野沢岱Ⅲ	縄文土器、青竜刀型石器等	29	味噌内	縄文（後）
13	野沢岱Ⅳ	縄文土器、土師器、須恵器	30	珠数掛	縄文(晩)、土師器
14	下聖	縄文（前・中・後）	31	十狐城	中世
15	上聖	縄文（前・中・後・晩）	32	大日堂前	縄文(中・後・晩)、平安、中世
16	家ノ後	縄文（後期末～晩期前葉）	33	陣場岱	土師器、須恵器、鉄滓
17	沢口	縄文（後）	34	大滝古館	土師器、中世陶器



第3図　周 辺 遺 跡 地 図

が認められる。弥生時代に至りその遺跡数は激減し、該期の遺跡においても遺物が散見されるだけで、生活の痕跡が具体的に認識される遺跡は皆無である。古墳時代の遺跡は、現在までのところ発見がなく、平安時代以降になり再び遺跡が認められる。したがって、弥生時代を含めると約1,000年間の空白期間が存在することになる。

次に、中山遺跡で検出された縄文中期と後期の遺構・遺物に関連する遺跡を取り上げ、当時の生活環境の一端を窺ってみたい。図幅内のこれまで調査された遺跡のうち、中期又は後期の遺跡数は13遺跡である。このうち中期及び後期の両時期に営まれた遺跡は、半数をこえる７遺跡を数える。

山館上ノ山遺跡（３）・本道端遺跡（５）等の調査結果から、縄文中期の集落の様子を窺ってみたい。住居は台地縁辺部に営まれ、台地中央部で遺構が希薄になる傾向があることから、集落の中央に広場の存在が推測される。集落を構成する竪穴住居跡の戸数は、本道端遺跡の中期末葉の集落の変遷から３戸以上のまとまりが推測される。竪穴住居跡には、複式炉が付設されている。大木系の土器が出土していることから、東北地方南部との文化的な交流があったことが推測される。

縄文後期においても、家ノ後遺跡（16）・萩峠遺跡（21）・大日堂前遺跡（32）等の調査結果から、竪穴住居跡は台地縁辺部に営まれ、２～４軒が集落を構成していたようである。土器

の器形は、それまでの深鉢一辺倒から浅鉢・壺・蓋形土器など多様性に富んだものに変わってくる。

以上の遺跡からは、性格不明の柱穴が検出される場合がある。これは、竪穴住居跡のほかに何らかの建物跡の存在が予想されるものである。中山遺跡からも柱穴が検出され、１間×１間の建物跡の存在が明らかになった。同様の建物跡は、萩峠遺跡からも発見されている。

（参考文献）

秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　大館』　1986（昭和61年）

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　1991（平成３年）

大館市史編さん委員会　『大館市史』　第１巻　1979（昭和54年）

比内町教育委員会　『秋田県北秋田郡比内町 大日堂前遺跡 ―発掘調査報告書―』　1982（昭和57年）

比内町教育委員会　『本道端遺跡』　比内町埋蔵文化財調査報告書　1986（昭和61年）

秋田県教育委員会　『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第84集　1981（昭和56年）

秋田県教育委員会　『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ―上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第173集　1988（昭和63年）

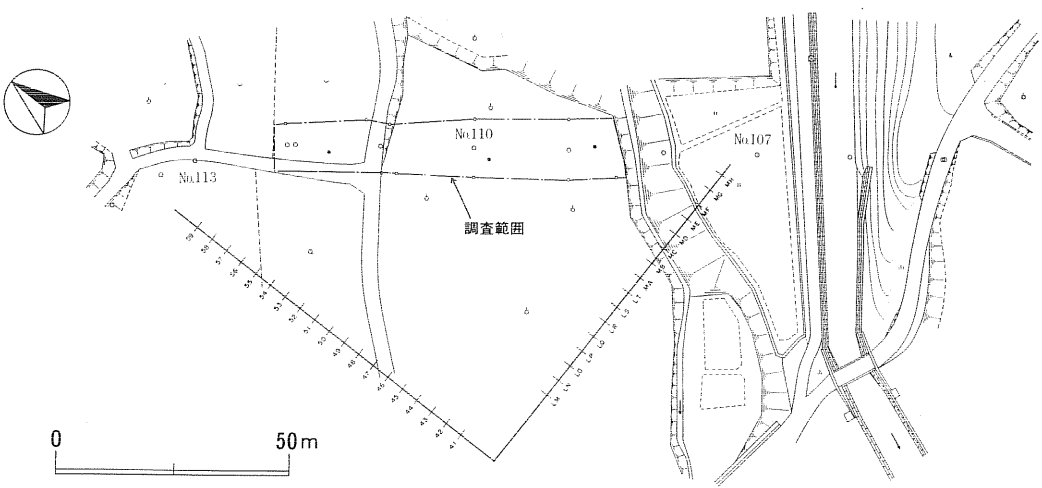
秋田県教育委員会　『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―家ノ後遺跡―』　1992（平成４年）

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観（第４図）

大館市街地から国道103号線を南下し、比較的よく開けた水田を見ながらしばらく行くと、左手に山地が迫ってくる。その山裾には、梨、りんご等の果樹が栽培されている。このあたりが大館市中山地区である。集落の中に入り、右手に地区集会所を見ながら集落の裏手に出るように進んでいくと、『中山林道』の立て札が認められる。その林道に入り、最初のＴ字路のあたりが遺跡である。

遺跡のある台地は、米代川右岸の河岸段丘である。段丘の南縁に国道103号線と中山集落、その北側に遺跡をその中に含む果樹園があり、さらに北へ行くにしたがい高度を増して山地地形へと移行していく。また、台地の東側は米代川に注ぐ中山沢により画されている。標高は、台地の東及び南側で75m前後、北に行くにしたがい高度を増し77m前後となる。中山沢により形成された谷底平野と台地との比高差は、７～９ｍである。現況は、梨やりんご等の果樹園のほか一部は畑となっている。



第４図　調査区周辺地形

第２節　調査の方法

１．調査区の設定

調査区の設定にあたっては、４ｍ×４ｍのグリッド法を用いた。すなわち、道路センター杭

Ｎｏ．110を原点とし、磁北を求める。原点における南北ラインをＹ軸、それと直交する東西ラインをＸ軸とし、４ｍ×４ｍの方眼をつくるように杭を設置した。

グリッドの呼称は、Ｙ軸に算用数字、Ｘ軸に２文字のアルファベットを付し、その組合わせにより行うものとし、グリッドの南東隅の杭により呼称するものとした。

２．発掘調査方法

表土の除去は、すべて手掘りにより行い、その運搬にはベルトコンベアーを用いた。黒色土を除去した後、地山漸移層又は地山上面で遺構のプラン確認を行った。黒色土中に平安時代後半に堆積したとされる火山灰（大湯浮石）が認められる場合は、その面で一度遺構のプラン確認を行った。

記録の方法は、図面による記録と写真による記録を行った。図面による記録は、遺構の平面図・断面図を作成するものとし、必要に応じてエレベーション図を作成した。縮尺は20分の１を原則としたが、竪穴住居跡の石囲炉等は10分の１の縮尺を用いている。

写真による記録は、遺構の断面や完掘の状況、遺物出土状況、遺跡の全景、作業風景等について行った。

出土遺物は、位置と層位又は標高を記録して収納した。

第３節　調査経過

９月１日　コンテナハウス、ベルトコンベアー等リース物品が搬入される。中山林道の北西側（ＬＲ55・56、ＬＱ55・56グリッド）の表土除去に着手した。　９月３日　ベルトコンベアーの電気配線が完了し、表土除去がさらに進捗した。基本層位の観察は、調査区の境界の断面で行うこととした。台風13号の接近に備え、道具小屋・フェンス等が飛ばないよう補強した。

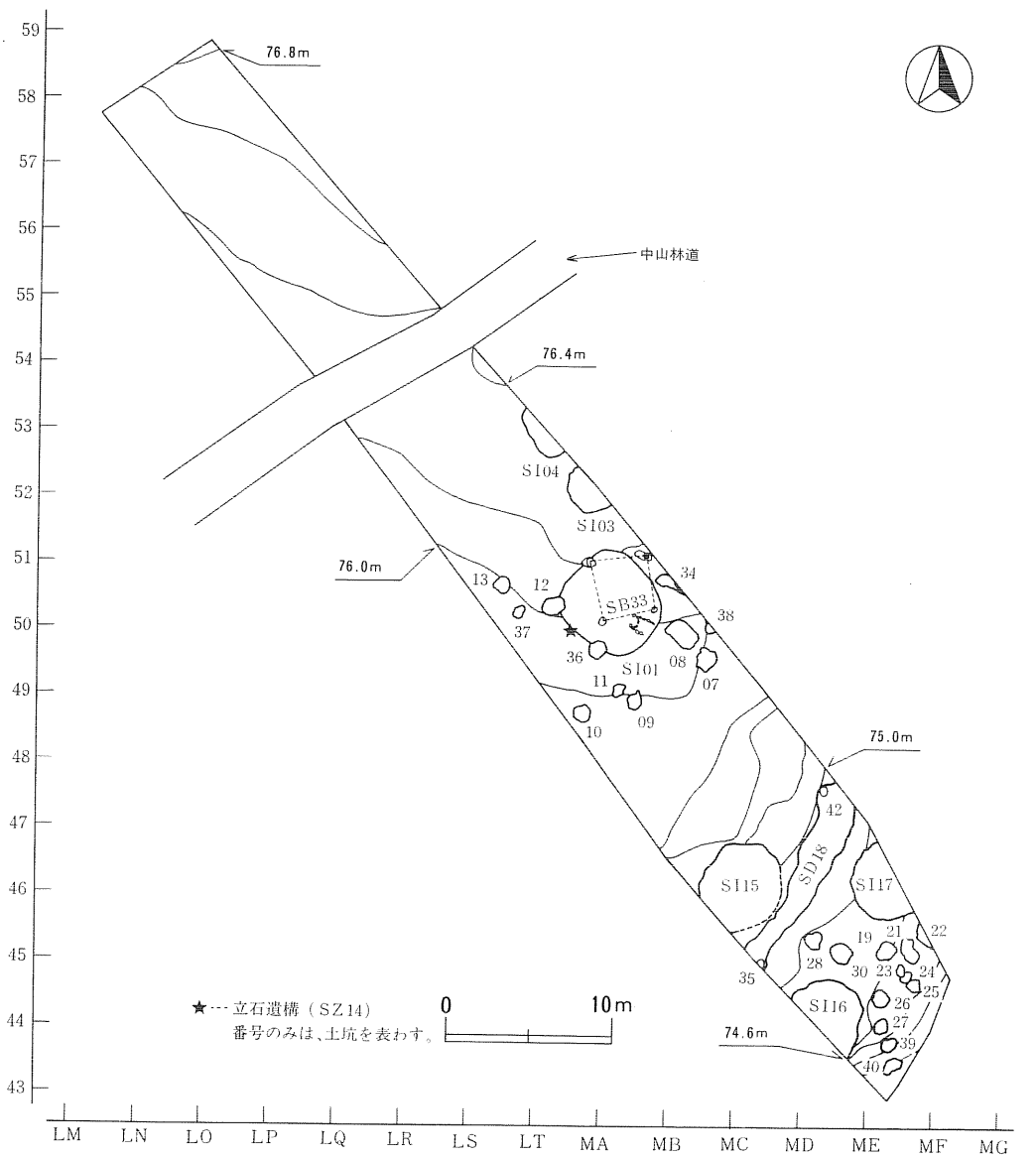
９月６日　ＬＴラインから東側の表土除去と遺物の取り上げを行った。大館市教育委員会板橋範芳係長が来跡。　９月７日　黒色土中に礫が多量に含まれており、非常に掘りにくい状況である。　９月８日　午後雨が激しくなったため、表土除去を中止し、これまで出土した遺物の水洗い作業を行った。　９月９日　ＭＥ45・ＭＦ45グリッドの黒色土の厚さは１ｍをこえており、大湯浮石が断続的にではあるが層として認められた。大湯浮石の下の層（Ⅳ層）中から大きな礫とともに縄文土器片がやや多く出土した。　９月10日　ＭＤ46グリッドⅣ層中から縄文後期中葉の深鉢が正位で出土した。土坑等の遺構の存在が疑われたが、周囲を精査してみてもプランは確認できなかった。　９月13日　Ⅳ層中から人頭大の礫の出土が著しいが、ＭＣ46グリッド杭を中心とする範囲には礫の出土が少なく、まわりの地山より低くなりそうである。したがって、竪穴住居跡の可能性が高いものと思われた。　９月16日　13日検出の竪穴住居跡

のまわりの礫の平面図作成に着手。作業員高松ミワさん、朝の通勤時に交通事故に巻き込まれ、重傷を負う。　９月17日　中山林道南東側について、遺構のプラン確認を行った。その結果、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構等を確認した。　９月20日　縮尺200分の１で遺構配置略図を作成した。ベルトコンベアー１基、故障により使用できなくなる。　９月22日　ＳＩ01・02の調査に着手する。確認面から10～15ｃｍで床面を検出した。　９月24日　ＳＩ03、04の調査に着手。ＳＩ04については、確認面で遺物が出ていたので、取り上げを行った。ＳＩ01・02は、プラン確認時新旧関係があるものと思われたが、土層観察用ベルトには壁としての立ち上がりが認められないことから、単なる埋土の違いであることがわかり、１軒であることが判明した。

９月27日　中山林道の北西側の表土除去と遺構のプラン確認作業を並行して行った。　９月29日　林道北西側のプラン確認作業終了。その結果、耕作によるものと思われる柱穴状のプランのほか、遺構らしいものは検出されなかった。

10月１日　ＳＩ01の床面精査を行った。当初本住居跡の柱穴と思われたものが、別の遺構のものの可能性が高くなってきた。それは、ＳＩ01のプランの外側に先の柱穴と同じ規模の柱穴を検出したからである。４本の柱で構成される掘立柱建物跡と推測される。ＳＩ03、04掘り下げ。　10月４日　ＳＩ03、04断面図作成。ＳＩ15、16、17着手。ＳＩ01を再度精査したところ、プランの内側にまだ掘れる部分が半円形に確認された。ＳＩ01より古い時期の竪穴住居跡の存在が予想される。　10月５日　ＳＩ01石囲炉平面図作成。ＳＩ15遺物取り上げ。　10月６日　ＳＩ15・16は焼失家屋であるが、焼土と炭化材の検出量はそれほど多くはなかった。ＳＤ18を掘り下げた所、フラスコ状土坑と切り合っていることがわかった。土層断面からフラスコ状土坑が古いようである。　10月７日　ＳＫ08の断面図を作成し、完掘しようとしたが、北西側にどんどん掘れていき長方形プランになるようである。これは、埋土の上面に地山の土が入っていたために本来のプランをつかむことができなかったことによる。長軸方向の土層観察用ベルトを急遽設定した。　10月８日　雨の多い天気の対策として、竪穴住居跡の上にシートで屋根をかけた。　10月12日　ＳＩ01のプランの内側に古い時期の竪穴住居跡が予想されたが、調査の結果貼り床部分であることがわかった。ＳＩ16の焼土、炭化材の検出作業終了。　10月13日　ＳＩ17のほぼ中央部に石囲炉を検出した。ＳＩ16の焼土、炭化材の検出状況を写真撮影し、実測に着手した。掘立柱建物跡の柱穴の検出作業に着手。101番から番号を付す。　10月14日　ＳＩ15出土の遺物番号（RP3）が重複していることが判明。注記時に番号を新たに付けてやる必要あり。地形測量着手。　10月18日　ＳＩ15、17の平面図作成。ＳＩ17の石囲炉を半截したところ、焼土層が黒褐色土を間に挟むように２枚検出された。さらに、焼土の範囲が上下で一致しないことから、炉が作り替えられたことが推測される。　10月20日　ＳＩ16の平面図作成。土坑・掘立柱建物跡柱穴の平面図作成。　10月21日　溝状遺構の平面図作成。撤収作業一

部着手。　10月22日　掘立柱建物跡柱穴の平面図作成後撤収し、調査を終了した。



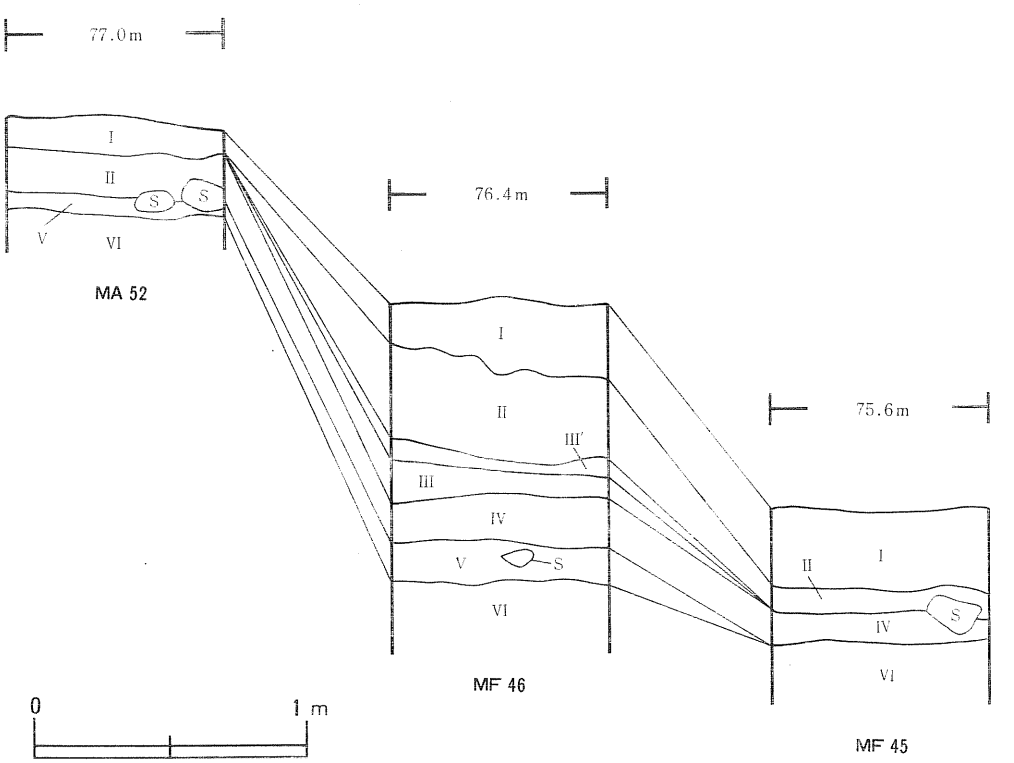
第５図　遺　構　配　置　図

第４章　調査の記録

第１節　遺跡の基本土層

北西から南東に長い調査区の北東側調査境界の土層を第６図に掲げた。ＭＦ45グリッドの土層が、中山沢に面する台地縁辺に近い部分である。そして、ＭＡ52グリッドへ向かうにしたがい、台地の中央部に近くなっていく。

ＭＦ46グリッドにおける土層が最も遺存がよく、表土から地山まで約１ｍの厚さがある。以下に各層の特徴を述べる。



第６図　基　本　土　層　図

Ｉ層　黒色(10YR1.7/1)シルト。耕作土。

II層　黒色(10YR1.7/1)シルト。地山粒、礫混入。しまりよい。

III層　黒褐色土(10YR2/2)シルト～砂。大湯浮石由来のシラスを多く含む。

III'層　黒色(10YR1.7/1～2/1)シルト。III層由来のシラスと炭を含む。しまりよく、粘性

あり。

Ⅳ層　黒色(10YR2/2)シルト。地山粒、礫（Ⅱ層より径が大きい）混入。しまりよく、粘性あり。縄文時代遺物包含層である。

Ⅴ層　黒褐色(10YR3/2)シルト～粘土。地山漸移層。

Ⅵ層　明黄褐色(10YR6/6)粘土。地山。

第２節　検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡６軒、土坑25基（フラスコ状土坑１基を含む）、立石１基、溝状遺構１条である。ほとんどの遺構が、縄文時代のものである。

１．縄文時代

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ33掘立柱建物跡（第７図、図版１）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＡ50・51、ＭＢ50・51グリッドでＳＩ01の床面精査中に検出した。Ｐ１は、ＳＩ01の貼床にかかっているにもかかわらず、床面精査時に検出されていることから、貼床がＰ１の上になされていなかったことがわかる。したがって、本遺構は、ＳＩ01よりも後につくられたものである。

〔規模〕　１間×１間の建物跡で、柱の間隔はＰ１―Ｐ２間がやや広く370cm、その他は約330cmである。ただし、調査区外（東側）にのびる可能性もある。

〔柱穴〕　柱穴は、西側に浅い段を有するもの（Ｐ２、Ｐ３）がある。浅い段を除いた柱穴の規模は、径50～58cm、深さ68～97cmである。深さにはばらつきがあるが、底面の標高は75.2m前後である。

〔埋土の状況〕　柱穴を確認した時、確認面において埋土を観察しているので、柱穴ごとに記載する。

Ｐ１：黒褐色（10YR2/2）シルト。地山粒、炭化物混入。しまりやや良い。

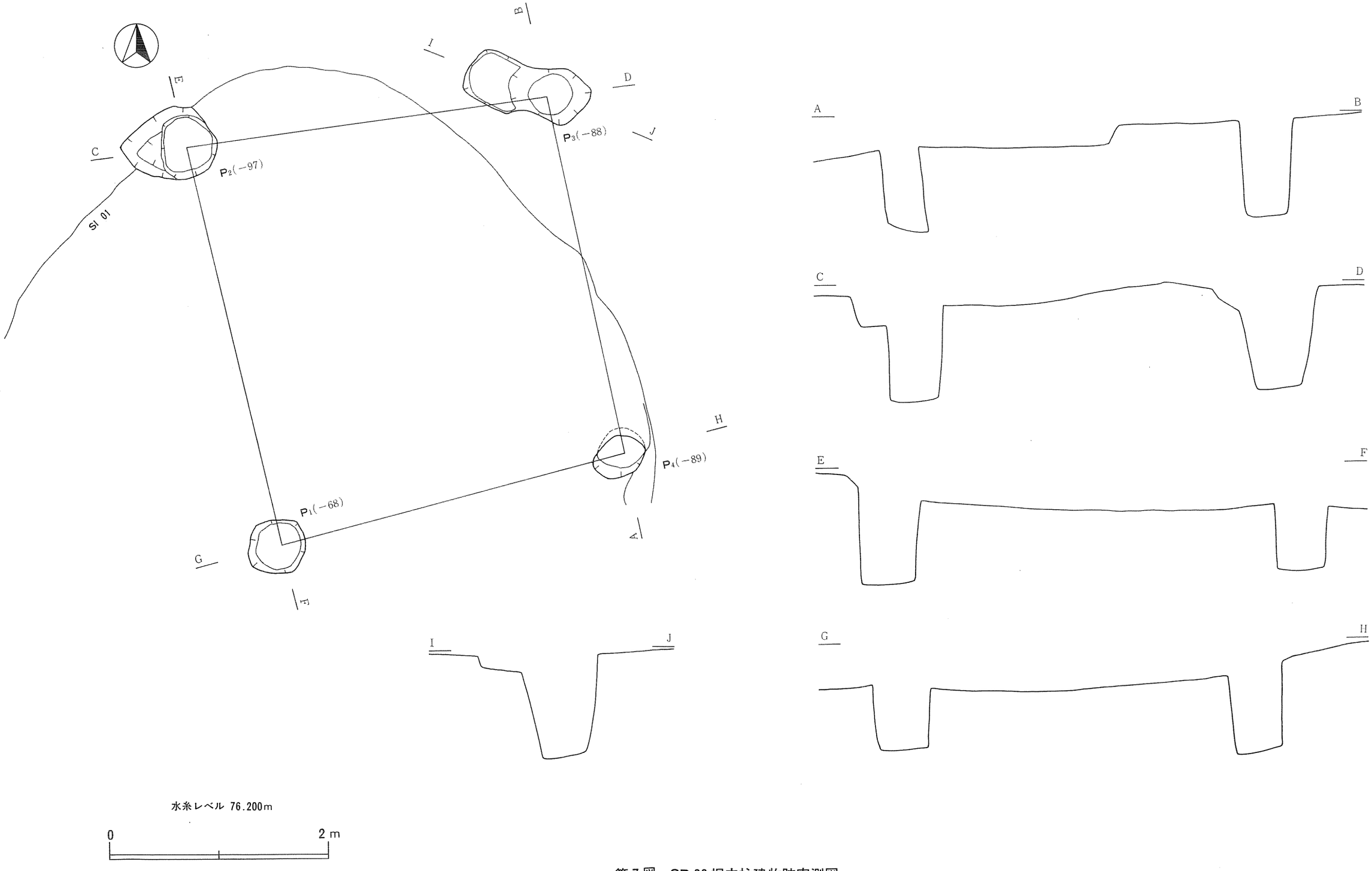
Ｐ２：黒褐色（10YR2/2）シルト。地山粒混入。しまりやや良い。

Ｐ３：黒褐色（10YR2/2）シルト。砂粒、礫を少量含む。

Ｐ４：暗褐色（10YR3/3）シルト。地山粒混入。しまりやや良い。

〔出土遺物〕　Ｐ２・Ｐ４埋土中から土器片14点が出土したが、小破片のため掲載できなかった。

〔時期〕　柱穴の検出状況から、縄文中期の竪穴住居跡（ＳＩ01）より後につくられていることがわかる。また、柱穴から出土した土器が、胎土・焼成などから後期のものと考えられることから、該期のものと推測される。



第７図　SB 33 掘立柱建物跡実測図

（２）竪穴住居跡

ＳＩ01竪穴住居跡（第８・９・25・28・30図、図版２）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＡ49・50、ＭＢ49・50・51グリッド地山面でプランを検出した。当初、竪穴住居跡２軒の切り合いと考えられたが、埋土の違いであった。

ＳＢ33、ＳＫ12、ＳＫ36と切り合っており、南西壁にほぼ接するように立石遺構（ＳＺ14）が位置する。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は隅丸方形に近く、断面は鍋底状である。

〔規模〕　長軸方向約610cm、短軸方向約550cm。確認面から床面までの深さ15～20cmである。面積は、約28m²である。

〔床面・柱穴〕　床面は、特に固くなっている部分は認められなかった。ほぼ中央部分の340×385cmの範囲が貼り床されていた。床面の標高は、75.7～76.0mである。

柱穴は、18ヶ所が検出され、第９図に床面からの深さを記した。Ｐ１～Ｐ７が主柱穴と考えられる。

〔付属施設〕　東壁際に馬蹄形の石囲炉を検出している。100×170cmの範囲の床面を10～15cm掘り下げたのち、長さ30～40cmの細長い石を左右とも３個ずつ１列に並べ、住居の内側から外側に向かってやや開くように配されている。壁際の石よりも住居の中心側の石がよく焼けている。

〔出土遺物〕　１は、住居跡西壁近くの埋土中から潰れた状態で出土した深鉢形土器である。底部は失われてしまっていた。口縁部が若干すぼまり、折り返し口縁状に粘土が一段厚くなっている。この一段厚くなっている部分を含め全面にＲＬ縄文が施されている。口径32.3cm、現有高39.3cmである。２は、貼床に用いた土の中から出土した小型の土器である。底部に最大径をもち、内側に緩いカーブを描きながら口縁部に達する。器面の調整は概して大雑把であり、縦方向に粘土を削り取った痕跡が認められる。底部は、若干上げ底である。器高7.5cm、口径4.2～4.6cm、推定の底径6.7cmである。10・11は、ＲＬ縄文の地文に沈線により逆「Ｕ」字状の懸垂文を施文し、円形の刺突文を施したものである。

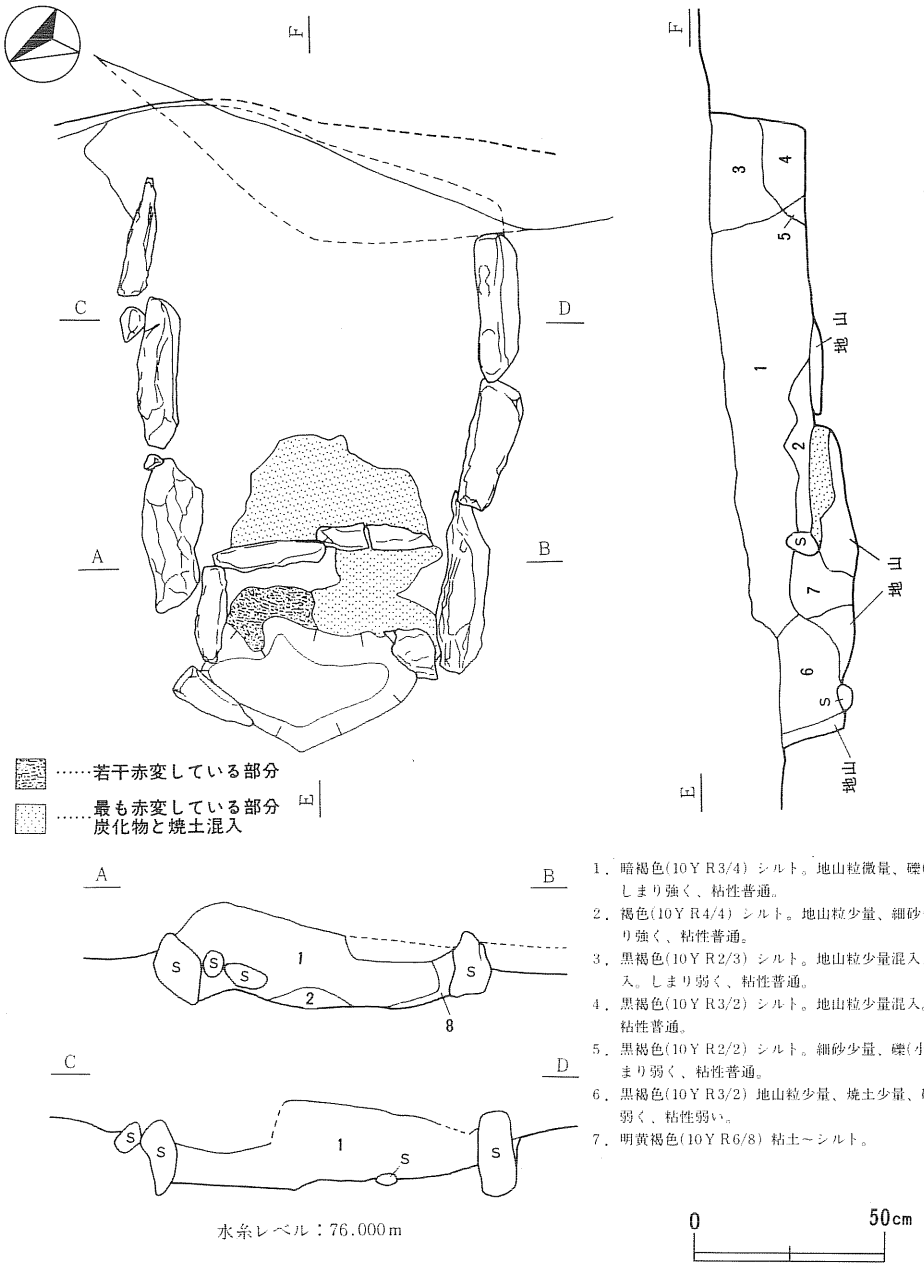
石器は、３点を掲載した。73・75は住居跡埋土中、74は貼床内の出土である。剥片の側縁に調整を施している。

〔時期〕　出土遺物、石囲炉の形態から縄文中期後半と推測される。

ＳＩ03竪穴住居跡（第10・30図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＡ51・52、ＭＢ51グリッド地山面でプランを確認した。調査区外にプランの半分近くがかかっている。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は円形と推測される。断面は鍋底形。

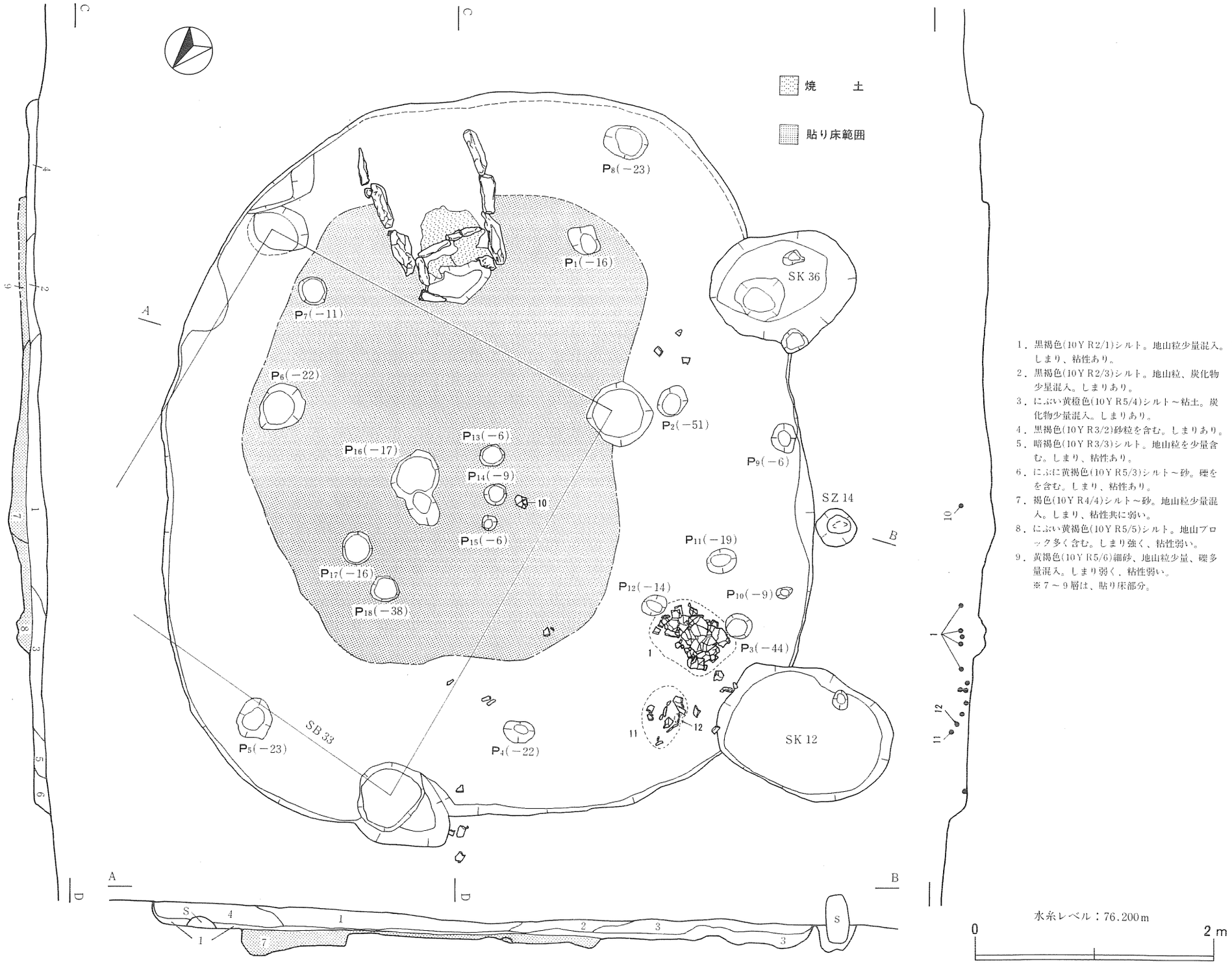


1．暗褐色(10Y R3/4) シルト。地山粒微量、礫(大)少量混入。しまり強く、粘性普通。
2．褐色(10Y R4/4) シルト。地山粒少量、細砂少量混入。しまり強く、粘性普通。
3．黒褐色(10Y R2/3) シルト。地山粒少量混入、礫(小)微量混入。しまり弱く、粘性普通。
4．黒褐色(10Y R3/2) シルト。地山粒少量混入。しまり普通、粘性普通。
5．黒褐色(10Y R2/2) シルト。細砂少量、礫(小)少量混入。しまり弱く、粘性普通。
6．黒褐色(10Y R3/2) 地山粒少量、焼土少量、礫混入。しまり弱く、粘性弱い。
7．明黄褐色(10Y R6/8) 粘土～シルト。

第８図　SI 01 竪穴住居跡石囲炉実測図

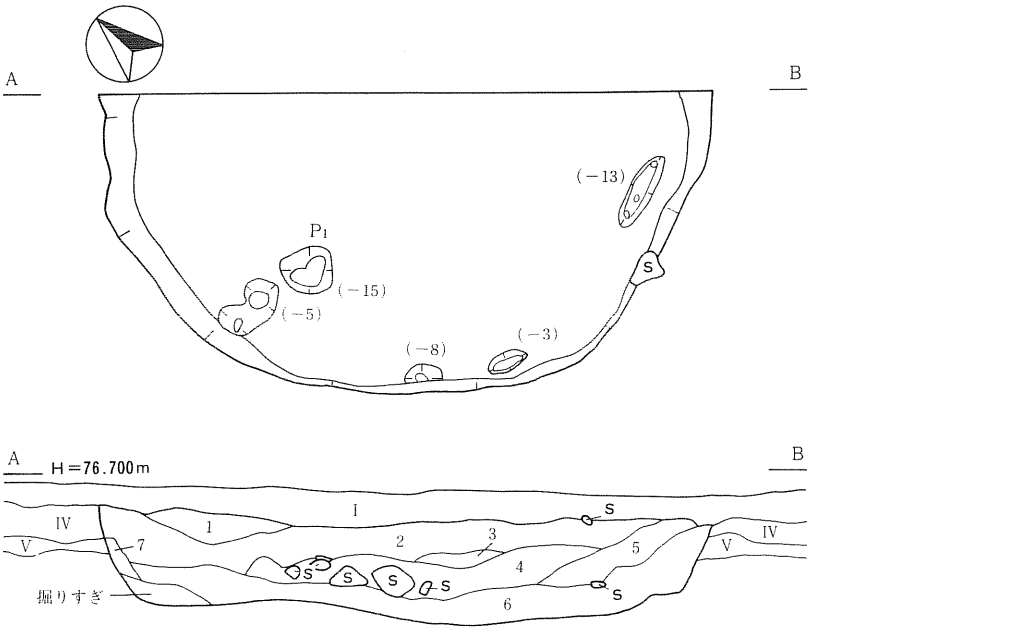
〔規模〕　径は300cmをこえるものと推測される。壁高は、確認面までは24～30cmであるが、調査境界で表土から土層観察が可能であった。それによると、掘り込み面はⅣ層上面であり、壁高は40～50cmである。

〔床面・柱穴〕　床面は、特に固く踏みしめられた形跡は認められない。床面の標高は、



1．黒褐色(10Y R2/1)シルト。地山粒少量混入。しまり、粘性あり。
2．黒褐色(10Y R2/3)シルト。地山粒、炭化物少量混入。しまりあり。
3．にぶい黄橙色(10Y R5/4)シルト～粘土。炭化物少量混入。しまりあり。
4．黒褐色(10Y R3/2)砂粒を含む。しまりあり。
5．暗褐色(10Y R3/3)シルト。地山粒を少量含む。しまり、粘性あり。
6．にぶに黄褐色(10Y R5/3)シルト～砂。礫をを含む。しまり、粘性あり。
7．褐色(10Y R4/4)シルト～砂。地山粒少量混入。しまり、粘性共に弱い。
8．にぶい黄褐色(10Y R5/5)シルト。地山ブロック多く含む。しまり強く、粘性弱い。
9．黄褐色(10Y R5/6)細砂、地山粒少量、礫多量混入。しまり弱く、粘性弱い。
※７～９層は、貼り床部分。

第９図　SI 01 竪穴住居跡実測図



第10図　SI 03 竪穴住居跡実測図

76.0m前後である。柱穴は、５ヵ所検出されたが、Ｐ１は主柱穴の可能性がある。

〔付属施設〕　炉又は石囲炉等は、調査が可能な範囲からは検出されなかった。

〔埋土の状況〕　５及び７層中に大きい礫を多量に含むことから、人為的な堆積の可能性がある。

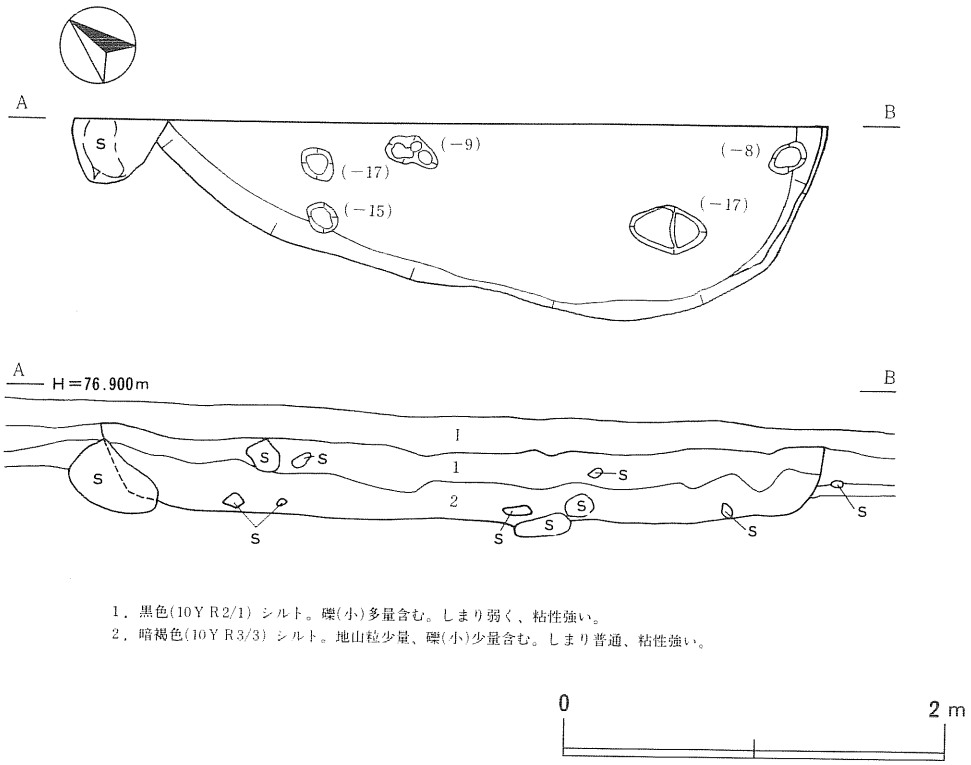
〔出土遺物〕　土器片８点、石器１点が出土した。土器片は小破片であることから、剥片石器１点を掲載した。76は、腹面の一側縁に調整を施し、直線的な刃部をつくり出している。石質は、頁岩である。

〔時期〕　出土した土器片は、薄手で焼成がいいことから、縄文後期と推測される。このことから、本住居跡の時期も一応後期と考えられる。

ＳＩ04竪穴住居跡（第11・26・28図、図版３）

〔検出位置・検出状況〕　ＬＴ52・53、ＭＡ52グリッド地山面でプランを検出した。確認面で多量の礫を検出している。南東1.5mにＳＩ03が位置する。

〔平面及び断面の形態〕　ほとんどの部分が調査区外にかかっており、実際に調査できたの



1．黒色(10YR2/1) シルト。礫(小)多量含む。しまり弱く、粘性強い。
2．暗褐色(10YR3/3) シルト。地山粒少量、礫(小)少量含む。しまり普通、粘性強い。

第11図　SI 04 竪穴住居跡実測図

は一部分である。したがって、平面形は明確でないが、楕円形ないしは隅丸方形と推測される。断面形は、鍋底状と推測される。

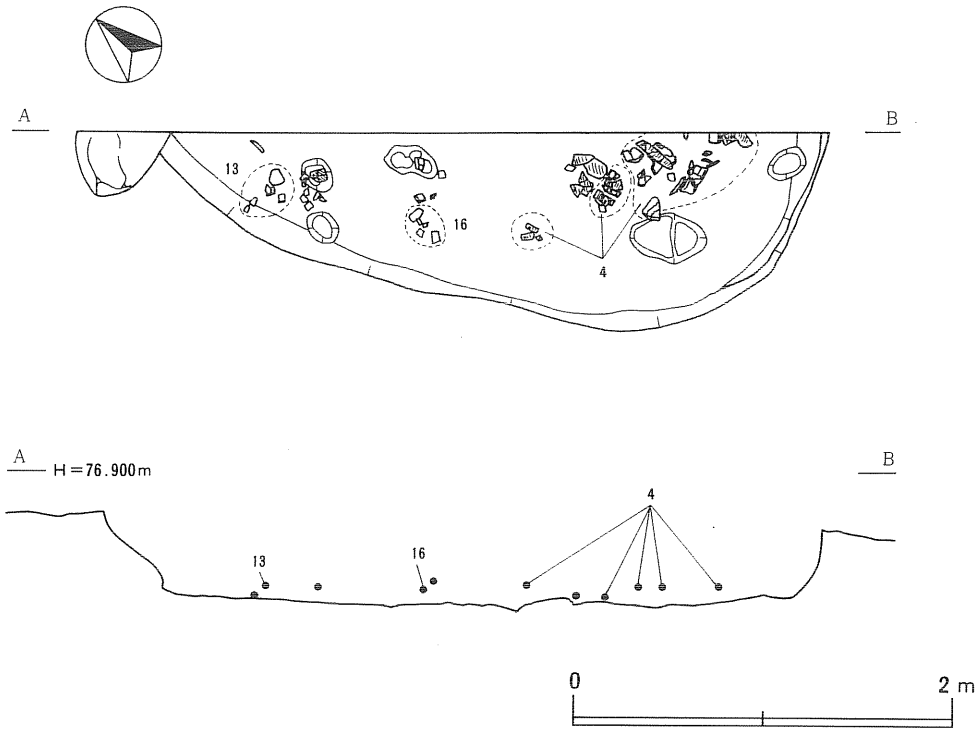
〔規模〕　調査境界、すなわち北西―南東方向で375cmである。確認面から床面までの深さは、6～17cmであるが、調査境界で表土から土層観察が可能であった。それによると、掘り込み面はⅣ層上面であり、壁高は35～40cmである。

〔床面・柱穴〕　床面は、特に固くしまった部分は認められなかった。床面の標高は、76.2m前後である。柱穴は、5ヵ所検出された。第11図に付した数字は、床面からの深さを表わしている。

〔付属施設〕　炉等は、調査可能な範囲からは検出されなかった。

〔埋土の状況〕　2層に分けられた。1層中に礫を多量に含む特徴がある。

〔出土遺物〕　土器6点を掲載した。4は、深鉢胴部下半から底部にかけてのものである。上げ底の底部から急な角度で直線的に立ち上がり、その後内湾ぎみに緩いカーブを描きながら開く器形である。文様は、LR結節回転文が施されている。火熱を受けた痕跡があり、内面に煤状炭化物が付着している。底径10.8cm、現有高19cmである。13・16も同一個体と思われる。14・15・35は、口縁が波状を呈する深鉢形土器の口縁部と底部である。口縁部は、



第12図　SI 04 竪穴住居跡遺物出土状況

折り返し口縁となっており無文、その下にＲＬ縄文が施されている。底部は、上げ底となっている。火熱を受けた痕跡が認められる。

〔時期〕　出土遺物から、後期と推測される。

ＳＩ15竪穴住居跡（第13・14・25・26・28・30・31図、図版３・４）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＣ45・46、ＭＤ45・46グリッドでⅣ層を掘り下げ中、黒色土中に帯状に礫群が認められた。礫を残し地山面で精査したところ、正確なプランを検出した。

〔平面形・断面形〕　平面形は楕円形と推測され、断面形は鍋底形である。

〔規模〕　長軸方向の推定規模550～560cm。短軸方向が約480cmである。壁高は、55cm前後である。

〔床面・柱穴〕　床面には、南側の一部を除いて固い面が認められる。また、地山に含まれる礫が露出し、ゴツゴツしている。床面の標高は、75m前後である。

柱穴は、16ヵ所検出されたが、位置関係からＰ１～Ｐ８が主柱穴と推測される。

〔付属施設〕　ほぼ中央部に地床炉、北東壁際に貯蔵穴と思われる落ち込み（Ｐ９）を検出した。Ｐ９は、57×65cm、深さ19cmの規模である。

また、地床炉の北側約１ｍのところに長さ60cm、幅35cmの偏平な自然石が検出された。

床面から約５cm浮いているが、ほぼ水平の位置を保っている。加工された痕跡はなく、用途は不明である。

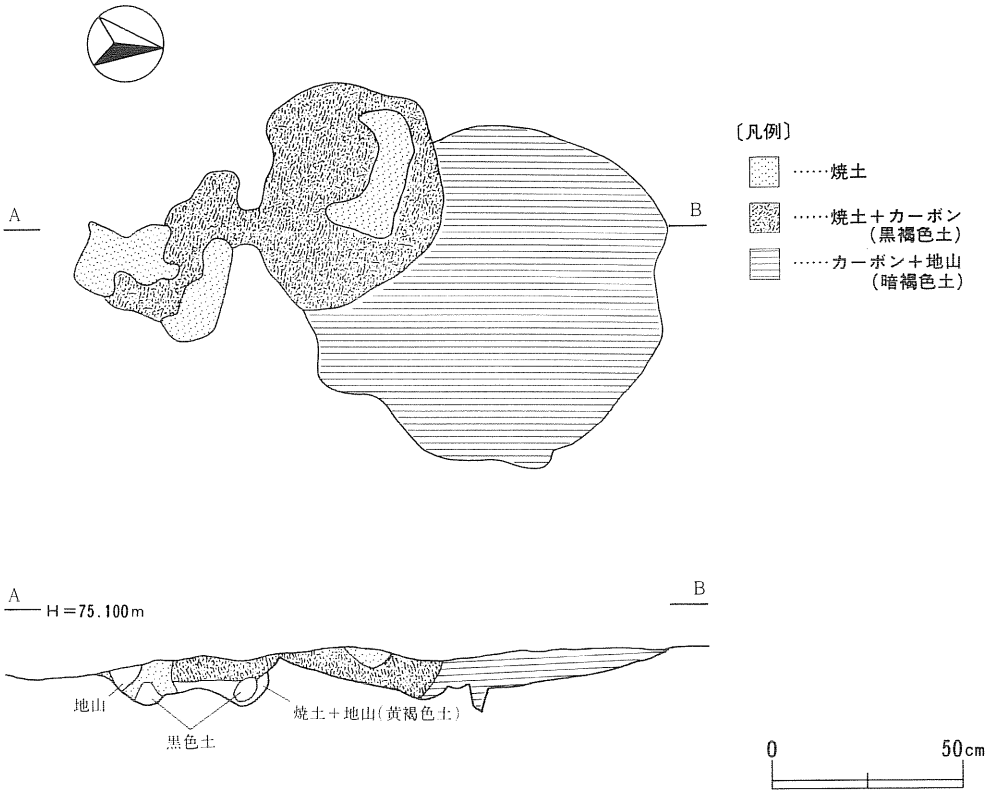
検出状況の項で述べた帯状の礫群は、竪穴住居跡のまわりを囲むようにあることから、いわゆる周堤と推測される。幅は、1.5m前後である。

〔埋土の状況〕　表土から観察ができ、４層に分けられた。観察の結果、掘り込み面はⅣ層中であることがわかった。

〔出土遺物〕　８は、小型の鉢形土器である。径の最も小さい底部から少し外に張り出すように立ち上がり、胴部上半に張り出しのピークを有する。頸部がくびれ、大きく開いて口縁に達する。口縁部の径が最大で、５単位の波状を呈する。口縁内面に沿って粘土紐を貼り付け、肥厚した口唇部を形づくっている。文様は、波状口縁に沿って刻目文が２列あり、その下の無文部をはさみ頸部に同様の文様が施されている。胴部には、地文にＲＬの縄文を施文したのち、沈線により２単位のクランク状の文様を描き区画線内側の縄文を磨消している。器高14.3cm、口径15.5cm、底径4.6cmである。外面に火を受けた痕跡があり、内面に煤状炭化物が付着している。６は、注口土器の口縁から頸部にかけてのものである。半球状の頸部から直線的に開き口縁部に達する。口唇に粘土をつまみ上げたような突起が４単位認められ、それに対応するように頸部にも突起がつけられる。突起上には刻目文が施されている。刻目文の断面は、Ｖ字状に近いものである。同様の文様は、口縁部、頸部、口縁部と頸部の境目に施されている。色調は黒褐色、外面及び口縁部内面はよく研磨されている。現有高7.5cm、口径約８cmである。18は、胴部の破片であり、胎土及び色調から同一個体と思われる。３は、住居跡南西壁際から出土した注口土器胴部上半のものである。注口部は基部から失われており、その部分にアスファルトが付着している。注口部を入れて４単位になるように粘土が貼り付けられていた痕跡が認められる。文様は、羽状縄文を施文した後、沈線により４単位の三叉状文を施しその中の縄文を磨消している。色調はにぶい黄橙色、最大径15.5cmである。内面には、粘土の輪積み痕が明瞭に残っている。７は、埋土中から出土した底部である。無節（Ｌ）の縄文が施されている。外面は、火を受けた痕跡があり、煤状の炭化物の付着が認められる。底部は若干上げ底になっており、色調はにぶい赤褐色である。底部の径は、約4.8cmである。19・20は、北西壁の近くから出土した注口土器の破片である。注口部が基部から破損しており、そこにアスファルトが付着している。他の注口土器に比較し、厚手につくられている。

石器は、剥片石器５点、礫石器１点の合計６点が出土した。出土位置は、いずれも埋土中である。剥片石器は、スクレーパーとしてとらえられるものである。刃部を剥片の側縁に有するもの（78～80）と端部に有するものがある（77・81）。79は、腹面と背面の両面に調整

第13図　Ｓ115竪穴住居跡実測図



第14図　SI 15 竪穴住居跡地床炉実測図

を行っている。77は、厚みのある剝片に急角度の刃部を設けるため、バルブのある一端を利用している。礫石器（82）は、側面に磨り面が認められる。

〔時期〕　出土遺物から縄文後期中葉又はそれ以降と推測される。

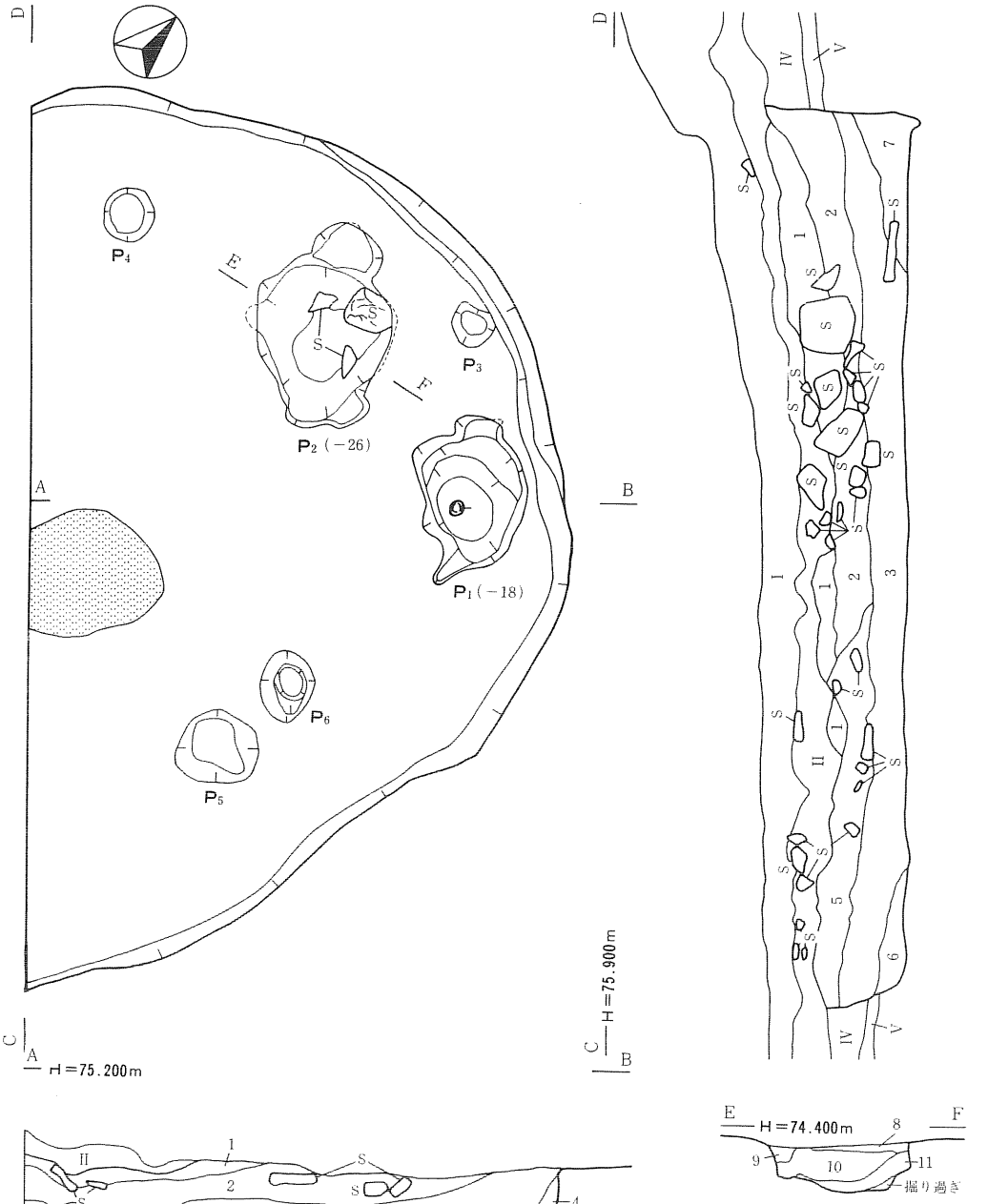
ＳＩ16竪穴住居跡（第15・16・26・28・29図、図版５）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＤ44、ＭＥ43・44グリッド地山面でプランを検出した。確認面では、人頭大の礫が多量に認められた。

〔平面及び断面の形態〕　住居プランの半分以上が調査区外にある。したがって、調査が可能であった部分から推測すると、平面形は楕円形になるものと思われる。断面の形態は、鍋底状である。

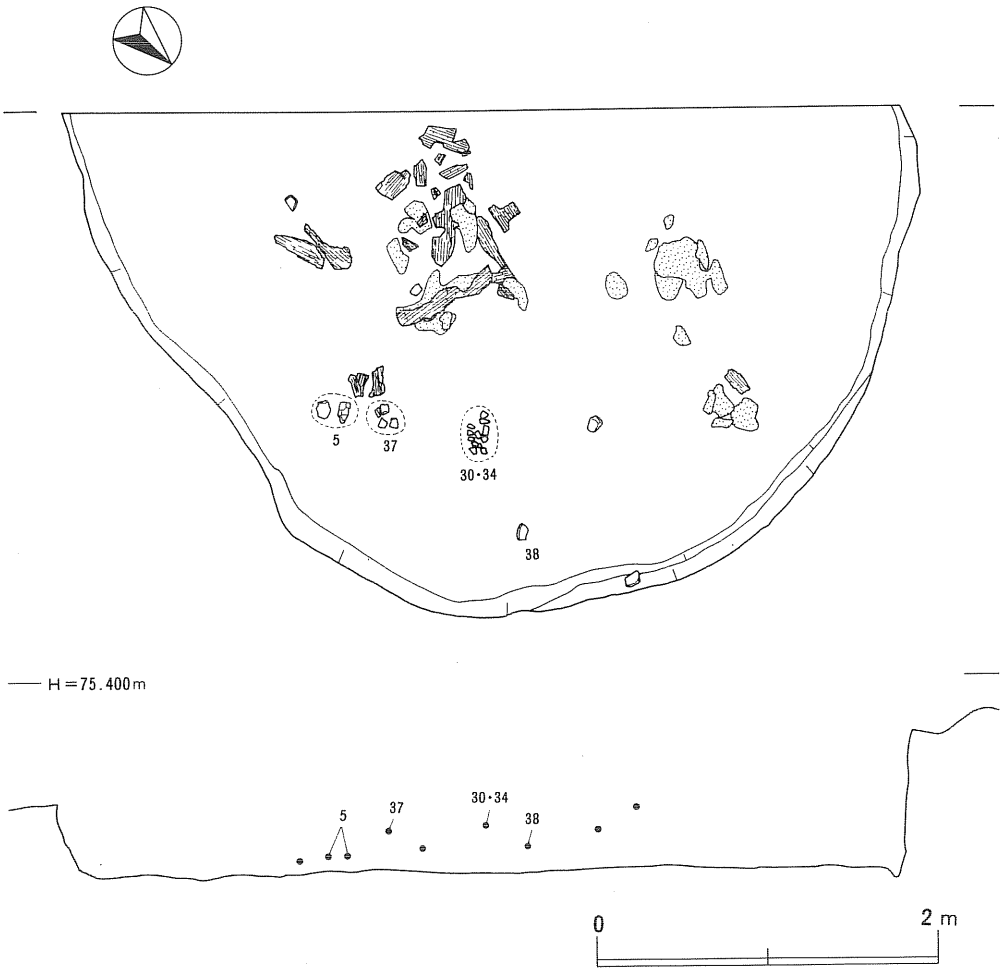
〔規模〕　長軸方向での現有長約300cm、短軸方向での現有長440cmである。壁高は、北西側で80cm、南東側で43cmである。

〔床面・柱穴〕　床面には多少の凹凸が認められ、特に固い面は観察されなかった。床面の標高は、74.3mである。床面から数cmから８cm浮いた状態で炭化材、焼土を検出した。



1．明黄褐色(10Y R6/6) 粘土～シルト。礫を少量混入。しまり強い。自然堆積とは考えられない層。
2．黒褐色(10Y R3/2) シルト。地山粒、同ブロック、炭混入。しまり強い、粘性若干あり。
3．黒褐色(10Y R3/2) シルト。炭化物、焼土の混入やや多い。
4．にぶい黄褐色(10Y R4/3) シルト。地山粒の混入多い。しまり強い。
5．黒色(10Y R2/1) シルト。地山粒、礫混入。しまり強い。
6．黒色(10Y R1.7/1) シルト。礫少量混入。しまり強い、粘性若干あり。
7．黒色(10Y R1.7/1)　シルト。地山粒、同ブロック混入。しまりやや弱い、粘性なし。
8．黒色(10Y R1.7/1) シルト。炭化物、地山粒、同ブロック混入。しまり、粘性あり。
9．黒褐色(10Y R2/2) シルト～砂。地山粒、同ブロック混入。しまりやや弱い。
10．黒色(10Y R1.7/1) シルト。地山粒、礫混入。しまり強い。
11．黒色(10Y R1.7/1) シルト。地山粒、礫混入。しまりやや弱い。

第15図　SI 16 竪穴住居跡実測図



第16図　SI 16 竪穴住居跡遺物出土状況図

柱穴は、５ヵ所検出したが、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ６が主柱穴の一部を構成するものと思われる。

〔付属施設〕　調査境界のほぼ中央に地床炉、Ｐ３とＰ４の間に貯蔵穴と思われるＰ２を検出した。Ｐ２の規模は、76×116cmである。

〔埋土の状況〕　６、７層は、自然堆積の可能性があるが、１～３層は人頭大の礫や焼土、炭化物の混入が認められ、人為堆積が推測される。３層中で検出された炭化材が床面よりも少し浮いた状態であることから、住居が使われなくなり周囲から土が流入した段階で、残存していた住居の材料を燃やしたものと思われる。

〔出土遺物〕　５は、胴部下半にＲＬ縄文が施された底部である。回転方向は、斜位方向である。施文範囲は全面ではなく、底部から４ないし５cmの範囲については無文である。火熱を受けた痕跡があり、内面に煤状炭化物の付着が認められる。底部は、やや上げ底となっている。現有高8.6cm、底部の推定径11.5cmである。23～28・34は、深鉢形土器の口縁部

である。23・24は、やや細い原体が用いられ、磨消縄文の手法が認められる。25は、無節（Ｒ）縄文が地文に用いられ、波状口縁に沿って２条の沈線が巡っている。34は、31・32と同一個体と思われ、３ないし４本で一単位の沈線が縦横に引かれている。内面には、横又は斜め方向の荒い調整痕が認められる。なお、同一個体の土器は、ＳＫ30埋土中からも出土している（61）。22・29は、壷形土器の口縁部である。口縁部が大きく開く器形であり、29は橋状把手が付けられている。30は、壷形土器の頸部から胴部にかけてのものである。37は、地文にＲＬ縄文を斜め方向に回転施文する際、縄の閉じた端を少し曲げて施文したものと思われる。胎土に砂粒を多く含み、厚手で焼成は悪い。72は、底部付近に２条の沈線を施文した資料であり、上げ底となっている。

33は、円盤状土製品である。

石器は、埋土中から２点出土した。腹面の側縁に調整を行って刃部をつくり出している（83・85）。

〔時期〕　出土遺物から、縄文後期前葉と推測されるが、埋土の状況及び出土遺物の中に若干古い様相のものも含まれることから、中期まで遡る可能性もある。

ＳＩ17竪穴住居跡（第17・27・29図、図版５）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＥ45・46、ＭＦ45・46グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　プランの半分近くが調査区外にかかっており、調査可能だった部分のプランから推測すると、北東―南西方向に長軸をもつ楕円形と思われる。断面形は、鍋底状である。

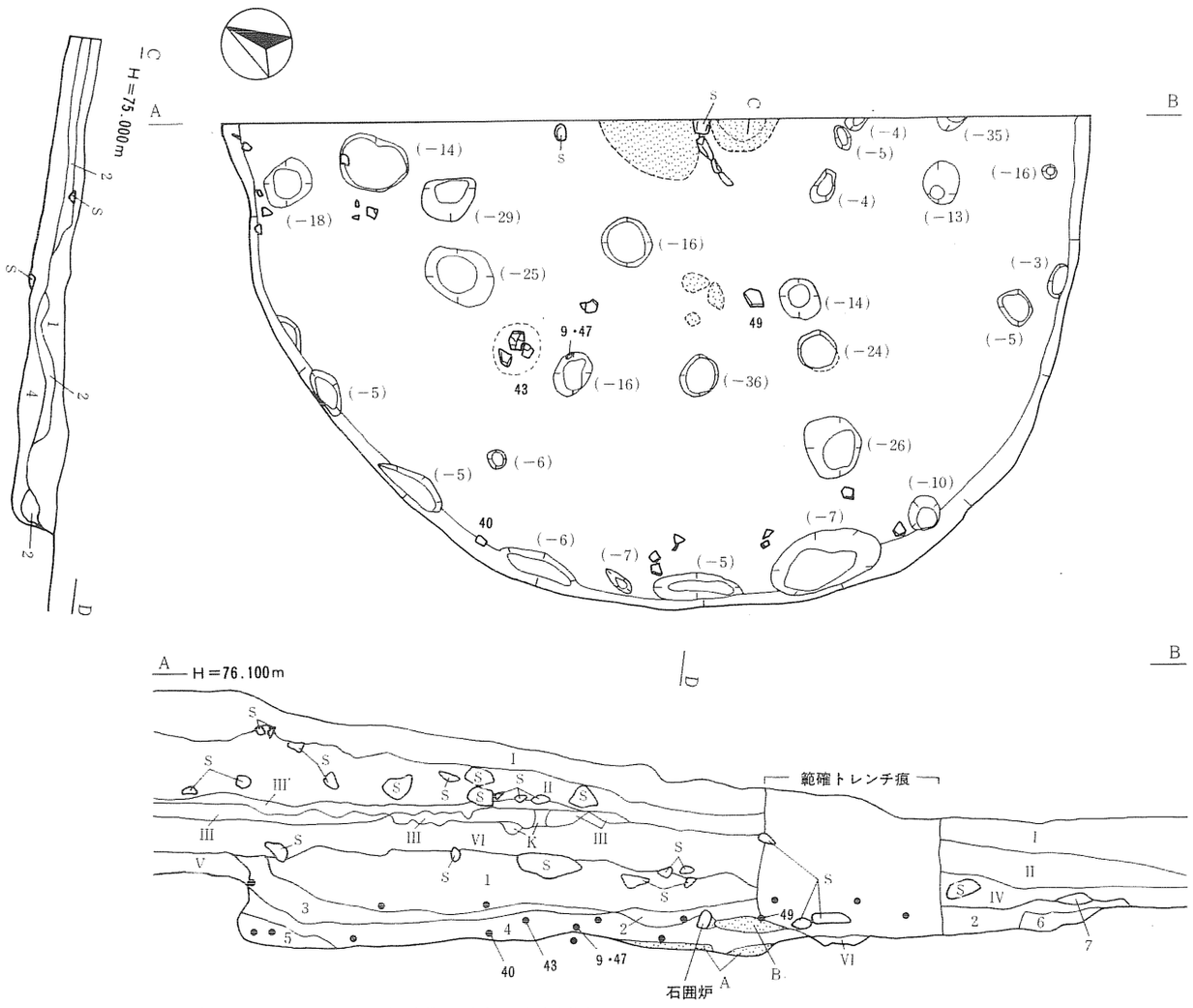
〔規模〕　長軸方向の現有長275cm、短軸方向490cmである。北西側壁高は、50cmをこえる。

〔床面・柱穴〕　断面観察の結果、炉と思われる焼土が上下２面あることがわかった。当初、焼土Ａを炉として使用し、のちに貼り床をして石囲炉（焼土Ｂ）を使用したものと思われる。貼り床は、石囲炉を含む北西側に施されている。また、南側の床面から５ないし６cm浮いた状態で焼土、炭化材を検出していることから、ＳＩ16と同様の状況が考えられる。

〔付属施設〕　炉Ａ、Ｂが、住居のほぼ中央部から検出されている。炉Ａの周囲に石の抜き取り痕等が認められなかったことから、石囲炉の可能性はないものと思われる。

〔埋土の状況〕　６層に分けられ、４層と５層は人為的な堆積と考えられる。

〔出土遺物〕　９は、小型の深鉢形土器の胴部下半から底部にかけてのものである。底部近くにＬＲ縄文を施し、その上端を１条の沈線により区画している。色調は暗赤褐色、火熱を受けた痕跡が認められる。41・47は、壷形土器の口縁部と胴部である。２条ないし３条の沈線を単位として文様が構成されるようであるが、詳細は不明である。43～45は、深鉢形土器



1．黒色(10Y R2/1) シルト。地山粒、多量の礫を含む。しまり強く、粘性若干あり。
2．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒、礫を小量含む。しまり強く、粘性あり。
3．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒、炭、礫を含む。しまり強く、粘性なし。
4．黒色(10Y R2/1) シルト。地山粒、焼土、炭、礫を含む。しまり強く、粘性なし。貼り床。
5．黒色(10Y R2/1) シルト。地山粒、炭、礫を含む。しまり非常に強く、粘性あり。貼り床。
6．黒褐色(10Y R3/2) シルト。地山粒、同小ブロック、炭、礫を含む。しまり強く、粘性あり。
7．明黄褐色(10Y R6/8) 砂。しまり弱く、粘性なし。

0　2 m

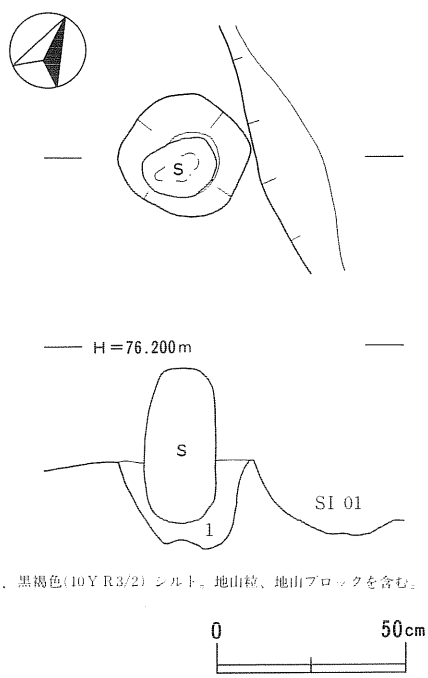
第17図　SI 17 竪穴住居跡実測図

の口縁部から胴部にかけてのものである。横走する細い沈線上に粘土による瘤状の貼り付けを行っている。色調は黒色から黒褐色、胎土に細砂粒を多く含む。46は、磨消し縄文手法の土器である。42も同様の手法の土器であるが、沈線の一部が刺突に置換えられている。いずれも色調は黒褐色、胎土に細砂粒を多く含む。48・49は、網目状撚糸文が施された胴部の資料、39・40は無文の口縁部資料である。40には火熱を受けた痕跡が認められる。

〔時期〕　出土遺物から、縄文後期中葉～後葉と推測される。

（３）立石遺構

ここで立石遺構としたのは、ピット状の掘り込みを行い、縦長の自然石を据えた遺構である。調査区からは、１基検出された。



第18図　ＳＺ 14 立石遺構実測図

ＳＺ14立石遺構（第18図、図版６）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＡ49グリッドⅣ層中で立石を検出し、地山面を精査したところ、石を据えるためと思われるピット状のプランを確認した。ＳＩ01の南西壁にほぼ接するような位置にある。

〔平面及び断面の形態〕　石を据えるために掘ったピット状の掘り込みの平面形は円形に近く、断面形は逆台形である。

〔規模〕　ピット状の掘り込みの規模は、径30cm、確認面からの深さ20～25cmである。自然石は、長さ約40cm、幅約20cmであり、地山面から石の頂部までは約25cmある。

〔埋土の状況〕　地山粒、同ブロックが含まれていることから、人為的な堆積であることが窺われる。

（４）土坑

合計25基が検出された。その分布は大きく２つのまとまりに分かれ、偏りがある。ひとつは、標高75.8～76.0mのＳＩ01竪穴住居跡周辺（ａ地点とする）であり、ひとつは標高74.2～74.8mの中山沢を臨む台地縁辺部（ｂ地点とする）である。

調査区は、幅10数mという非常に限られた範囲であるが、以上のような目で調査区を見ると、竪穴住居跡にもその傾向が窺われる。このことは、土坑が竪穴住居跡と密接に関係しているとみることも可能である。

①ａ地点の土坑

ＳＫ07土坑（第19・29図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＣ49グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　北東―南西方向に長軸有する楕円形に近い。断面形は皿状である。

〔規模〕　長軸158cm、短軸120cm、確認面からの深さ40cm前後である。

〔底面の状況〕　地山に含まれる礫が露出しており、凹凸が著しい。

〔埋土の状況〕　20cm大の礫が多く含まれており、人為的な堆積の可能性がある。

〔出土遺物〕　土器片50数点、石器２点が出土した。土器は、ほとんどが無文であることら、口縁部の資料を中心に掲載した。53は、深鉢形土器の口縁部であり、波状を呈するものである。内面に煤状炭化物が付着している。

ＳＫ08土坑（第19図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＣ49・50グリッド地山面でプランを検出した。当初、円形だと思われたプランは、掘っていくうちにどんどん北西側にひろがり長方形プランであることが明らかになった。このため、土層断面の一部を記録することができなかった。

西側に倒木痕があり、本遺構が若干の攪乱を受けている。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は長方形、断面形は鍋底状である。

〔規模〕　長辺200cm、短辺120cm、確認面からの深さ40～45cmである。

〔底面の状況〕　ほぼ平坦であるが、北西側に緩く傾斜している。

〔埋土の状況〕　埋土の大部分を占める１～３層には、炭化物が含まれている。また、土層注記にはないが、礫の混入も２層を中心に目立つ。

〔出土遺物〕　土器片が５点出土した。いずれも胴部の資料であるが、すべて無文である。

ＳＫ09土坑（第19図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＢ48グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　北側から北東側にかけて掘りすぎてしまったが、平面形は南北方向に長軸を有する楕円形である。断面形は、鍋底状である。

〔規模〕　長軸方向104cm、短軸方向80cm、確認面からの深さ15～20cmである。

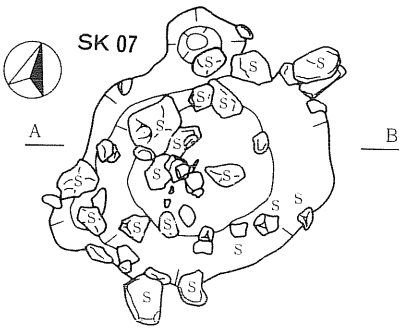
〔底面の状況〕　底面に認められる小ピット状のものは、木の根によるものと思われる。それを考慮すると、ほぼ平坦であったと推測される。

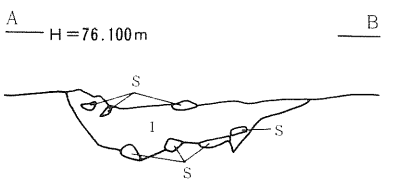
〔埋土の状況〕　黒褐色系の土が主体であり、礫をやや多く含む。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

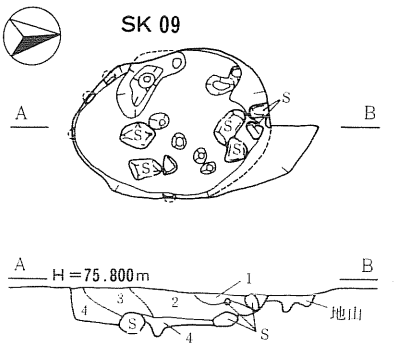
ＳＫ10土坑（第20図、図版６）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＡ48グリッド地山面でプランを確認した。

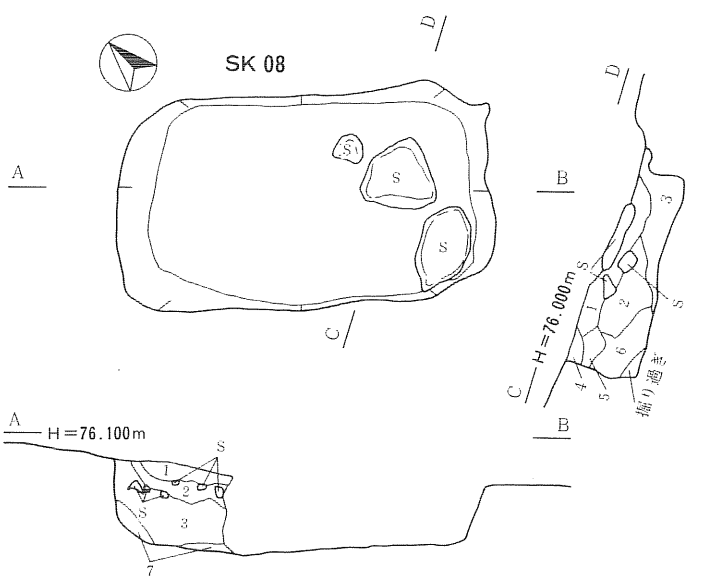




1．黒褐色(10Ｙ R3/2) シルト。地山粒、礫(大)を含む。



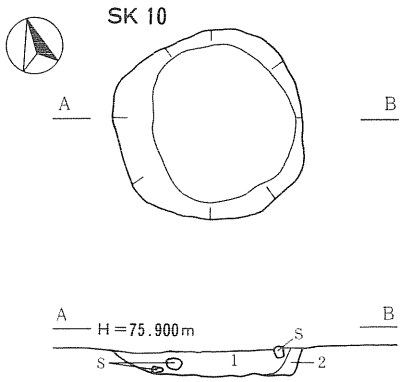
1．黒褐色(10Ｙ R2/2) シルト。地山粒少量混入。しまり、粘性あり。
2．黒褐色(10Ｙ R2/3) シルト。地山粒(極小)少量、礫(小)少量混入。しまり、粘性あり。
3．黒褐色(10Ｙ R2/1) シルト、地山粒少量、礫(大)少量混入。しまり弱く、粘性あり。
4．暗褐色(10Ｙ R3/3) シルト。地山粒多量混入。しまりあり、粘性あり。



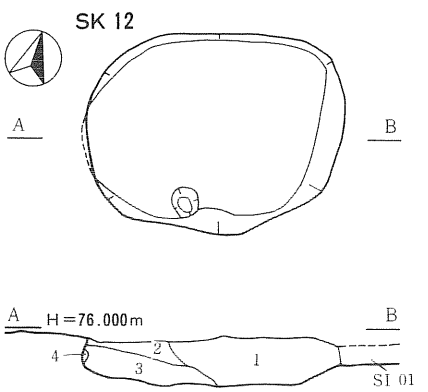
1．黒褐色(10Ｙ R3/2) シルト。炭化物、砂を少量含む。しまり、粘性あり。
2．にぶい黄褐色(10Ｙ R4/3) シルト。炭化物(やや大粒)、砂を少量含む。しまりあり。
3．褐色(10Ｙ R4/4) シルト～砂。地山の砂、炭化物を含む。しまりあり。
4．暗褐色(10Ｙ R3/3) シルト。地山の砂を含む。硬質層。
5．黒褐色(10Ｙ R2/2) シルト。地山の砂を少量含む。しまりあり。
6．黒褐色(10Ｙ R2/3) シルト～砂。地山の砂をやや多く含み、しまり悪い。
7．黄褐色(10Ｙ R5/6) 粘土～シルト。
※４～６層は、倒木根に起因する層と考えられ、本遺構を切っているものと推測される。

0　1 m

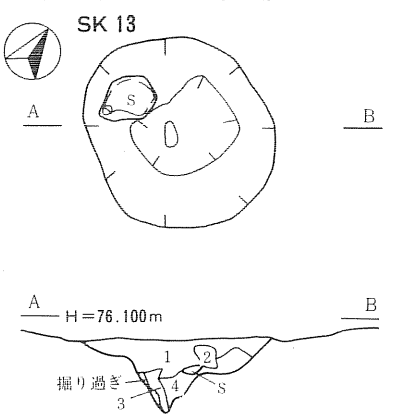
第19図　SK 07・SK 08・SK 09 土坑実測図



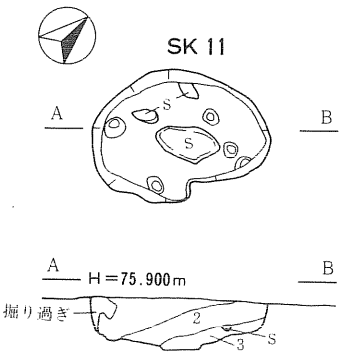
1．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒少量、礫多量混入。しまりあり、粘性なし。
2．黄褐色(10Y R5/6) 細砂。礫多量含む。しまりあり、粘性なし。



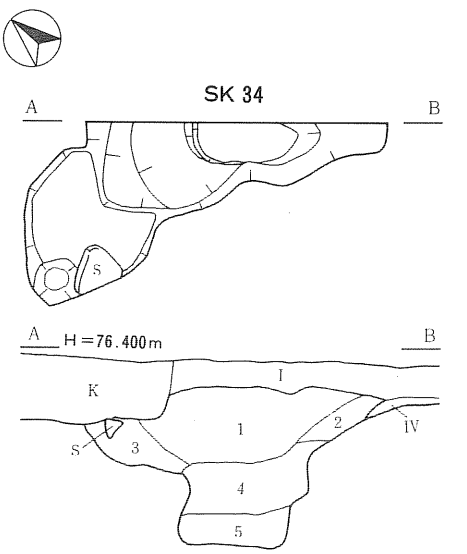
1．黒褐色(10Y R3/2) シルト。礫をやや多く含む。しまり強い。
2．黒褐色(10Y R3/2) シルト。礫を含まず、硬質。
3．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒、地山小ブロックを含む。
4．褐色(10Y R4/6) 粘土～シルト。硬質。



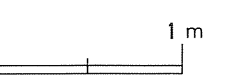
1．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒少量、礫(小)少量混入。しまり普通、粘性あり。
2．黒褐色(10Y R2/3) シルト。地山粒多量混入。しまり弱い、粘性強い。
3．黒褐色(10Y R3/2) シルト。地山粒少量混入。しまり弱い、粘性強い。
4．暗褐色(10Y R3/4) シルト。地山粒多量、礫(小)少量混入。しまり、粘性普通。



1．暗褐色(10Y R3/2) シルト。地山粒少量、炭化物(小)微量、礫(小)少量混入。しまり普通、粘性あり。
2．にぶい黄褐色(10Y R4/4) シルト。細砂、地山粒多量混入。しまり普通、粘性弱い。
3．にぶい黄褐色(10Y R4/3) シルト。砂、地山粒少量、礫(小)少量含む。



1．黒褐色(10Y R2/3) シルト。地山粒、礫を含む。しまり、粘性あり。
2．暗褐色(10Y R3/3) シルト。地山粒の混入多い。しまりやや弱い、粘性あり。
3．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山ブロックを含む。しまりあり、粘性あまりなし。
4．黒褐色(10Y R2/3) シルト。地山粒、礫を含む。しまりやや弱い、サラサラしている。
5．黒褐色(10Y R3/2) シルト～砂。地山粒、砂を含む。しまり強い、粘性少しあり。



第20図　SK 10・SK 11・SK 12・SK 13・SK 34 土坑実測図

〔平面及び断面の形態〕　平面形は円形、断面形は東側の壁の一部の立ち上がりがやや急であるが、それを除くと皿状である。

〔規模〕　径100cm前後、確認面からの深さは10～15cmである。

〔底面の状況〕　底面は、多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。

〔埋土の状況〕　東側の壁際に黄褐色砂の堆積が認められるほかは、礫を多量に含む黒褐色土が占めている。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ11土坑（第20図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＢ49グリッド地山面でプランを検出した。ＳＫ09から約１ｍ北西側に位置する。

〔平面及び断面の形態〕　南東側は少し掘りすぎているが、北東―南西方向に長軸を有する楕円形と思われる。断面形は、逆台形状である。

〔規模〕　長軸方向90cm、短軸方向約60cm、確認面からの深さ20cm前後である。

〔底面の状況〕　北東側は掘りすぎており、小ピット状の落ち込みは、木根によるものと思われる。

〔埋土の状況〕　地山粒がブロック状、あるいは層をなすように混入していることから、埋められたものと推測される。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ12土坑（第20図、図版６）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＡ50グリッド地山面でプランを検出した。隅丸方形のＳＩ01の西コーナー部分と重複している。本遺構が、ＳＩ01を切ってつくられている。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は、ほぼ東西に長辺を有する隅丸方形に近い。断面形は、鍋底状であるが、西側の壁はオーバーハングしている。

〔規模〕　長辺135cm、短辺106cm、確認面からの深さ23～27cmである。

〔底面の状況〕　小ピット状の落ち込みが認められるが、本遺構に伴うものか不明である。

〔埋土の状況〕　黒褐色土が多く堆積しており、２層が硬質であるのに対し、最後に堆積した１層のしまりが悪い。

〔出土遺物〕　胴部の破片２点が出土したが、無文である。

ＳＫ13土坑（第20図）

〔検出位置・検出状況〕　ＬＴ50グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は、北西―南東方向に長軸を有する楕円形である。断面形は、逆三角形状であるが、ほぼ中央の最深部が木根によるものとすると、本来は逆台形状で

あったと思われる。

〔規模〕　長軸方向108cm、短軸方向91cm、確認面からの深さは10～18cmである。なお、中央部の最深部は38cmである。

〔底面の状況〕　ほぼ中央の最も深い部分は、図で表現した以上に凹凸が著しく、木根による攪乱と推測される。

〔埋土の状況〕　３層の入り方から、木根による可能性が高いと思われる。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ34土坑（第20図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＢ50、ＭＣ50グリッド地山面でプランを検出した。ＳＢ33のような掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性もあるが、調査範囲外にプランの半分近くがあり全体が不明であることから、土坑として掲載した。

〔平面及び断面の形態〕　前述のように、全体のプランが不明であることから、調査が可能だった部分から平面形を推測するほかないが、整った形ではないようである。断面形は、皿状に推移した後中央部がもう一段鍋底状に落ち込む。

〔規模〕　調査境界線上での長さが159cm、深さが84cm前後である。

〔底面の状況〕　中央部分が若干高くなるようであるが、全体に平坦である。

〔埋土の状況〕　黒褐色土を主体とし、掘り込み面はⅣ層上面と推測される。

〔出土遺物〕　胴部の破片６点が出土したが、無文のものであった。

ＳＫ36土坑（第21図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＡ49、ＭＢ49グリッド地山面でプランを検出した。ＳＩ01の南コーナー付近において切り合い関係にある。本遺構が、ＳＩ01を切ってつくられている。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は南西―北東方向に長軸を有する楕円形に近く、断面形は逆三角形状である。

〔規模〕　長軸方向122cm、短軸方向96cm、確認面からの深さ50cmである。

〔底面の状況〕　平坦な面は認められないが、平滑である。一部、木根による攪乱を受けている。南西側は、かなり掘りすぎてしっまった。

〔埋土の状況〕　５層に分けられた。第５層は、壁の崩落したものと推測される。

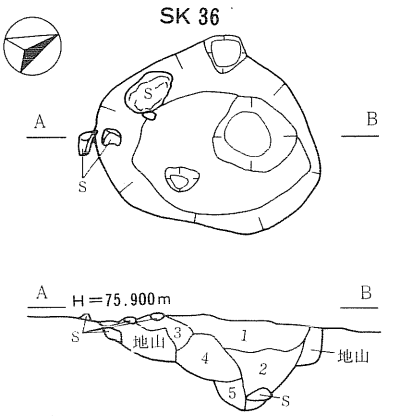
〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ37土坑（第21図）

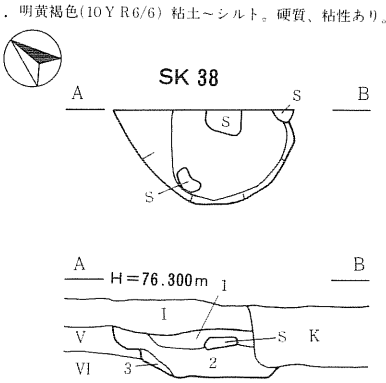
〔検出位置・検出状況〕　ＬＴ50グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は不整円形、断面形は逆台形である。

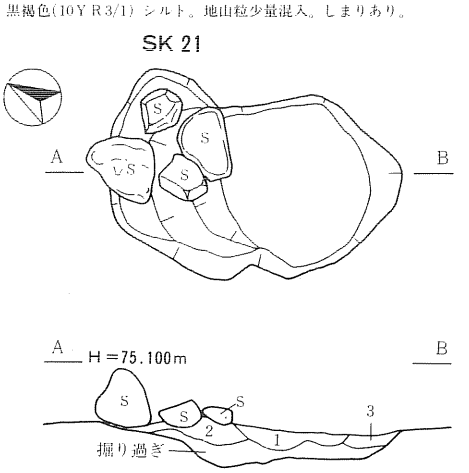
〔規模〕　71×78cm、確認面からの深さ17cmである。

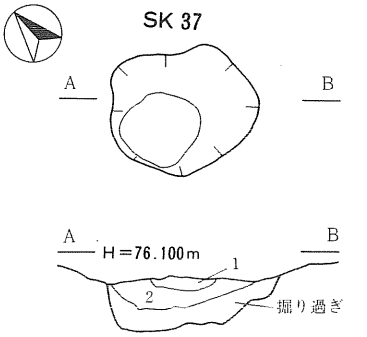


1．黒褐色(10Ｙ R2/3) シルト。地山粒少量含む。しまりあり。
2．黒褐色(10Ｙ R3/1) シルト。地山粒少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
3．褐色(10Ｙ R4/4) シルト～粘土。地山粒多く含む。
4．黒褐色(10Ｙ R3/2) シルト。地山粒、炭化物を含む。しまり強い、粘性あり。
5．明黄褐色(10Ｙ R6/6) 粘土～シルト。硬質、粘性あり。

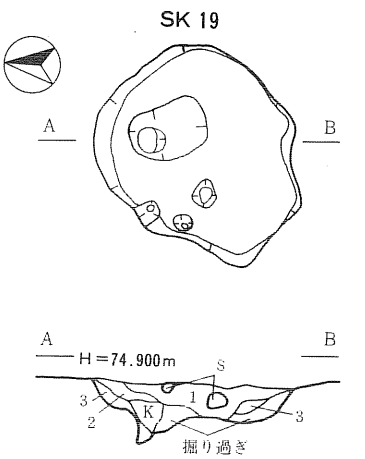


1．黒色(10Ｙ R2/1) シルト。炭化物混入。しまり強い。
2．黒褐色(10Ｙ R2/2) シルト。地山粒、同ブロック、炭混入。
3．黒褐色(10Ｙ R3/1) シルト。地山粒少量混入。しまりあり。





1．黒色(10Ｙ R2/1) シルト。地山粒少量混入。しまり、粘性普通。
2．黒褐色(10Ｙ R3/2) シルト。地山粒少量、礫(中)少量混入。しまり弱い、粘性普通。



1．黒色(10Ｙ R2/1) シルト。地山粒少量混入。しまり、粘性あり。
2．黒褐色(10Ｙ R2/2) シルト。地山粒少量混入。しまりやや弱い。
3．黒褐色(10Ｙ R3/2) シルト。地山粒少量混入。しまり２層より弱い。

1．黒褐色(10Ｙ R2/2) シルト。地山粒やや多い。しまりあり、粘性あまりなし。
2．黒褐色(10Ｙ R2/3) シルト。地山粒多い。しまりやや弱い、粘性なし。
3．にぶい黄褐色(10Ｙ R5/4) シルト～粘土。しまり強い、粘性なし。

0　1 m

第21図　SK 36・SK 37・SK 38・SK 19・SK 21 土坑実測図

〔底面の状況〕　多少の凹凸が認められる。

〔埋土の状況〕　２層に分けられた。いずれも黒色系の土であり、第２層中には礫の混入が認められる。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ38土坑（第21図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＣ49・50グリッド地山面でプランを検出した。プランの半分近くが調査範囲外にある。南東側上部は、攪乱を受けて立ち上がりの一部が失われている。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は、円形ないしは楕円形と推測される。断面形は、逆台形である。

〔規模〕　境界線上での径が82cm、深さ約26cmである。

〔底面の状況〕　北西から南東に向かって幾分傾斜しているが、ほぼ平坦である。

〔埋土の状況〕　掘り込み面は、耕作（Ｉ層）により上部に攪乱を受けていることを考慮すると、Ⅳ層中と推測される。埋土は、３層に分けられ、１及び２層中に炭化物を含む。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

②ｂ地点の土坑

ＳＫ19土坑（第21図、図版７）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ45グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は隅丸方形に近いが、整った方形ではなく南西側に張り出しを有するような形状とみることもできる。断面形は、鍋底状である。

〔規模〕　100×118cm、確認面からの深さ15～20cmである。

〔底面の状況〕　底面には、木根によるものと思われる凹凸が認められる。

〔埋土の状況〕　３層に分けられたが、２ないし３層はしまりに欠け、木根による攪乱の可能性が高い。

〔出土遺物〕　土器片（胴部）６点が出土したが、無文のものであった。

ＳＫ21土坑（第21図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ45グリッド地山面でプランを確認した。ＳＫ19土坑の東隣に位置する。

〔平面及び断面の形態〕　検出時は楕円形と思われたが、北側のプランが広がり不整形となった。断面は鍋底状であるが、北西側に緩い段を有する。

〔規模〕　105×155cm、確認面からの深さ10～13cmである。

〔底面の状況〕　底面は、平坦でなく凹凸が認められる。

〔埋土の状況〕　３層に分けられた。１層の入り方にやや不自然な点が認められるが、別遺

構と断定するような資料は得られなかった。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ22土坑（第22図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ45グリッド地山面で礫のまとまりとともにプランを検出した。プランの半分以上は、調査区外にあり、調査ができたのは一部にすぎない。このため、便宜上ＳＫ（土坑）として記載した。

〔平面及び断面の形態〕　方形基調であるが、全体の形状は不明である。断面形も逆台形状であるが、一部深くなる。

〔規模〕　調査境界上で278cm、深さは24～53cmである。

〔底面の状況〕　木根によるものと思われるピット状の攪乱は認められるが、ほぼ平坦である。ただ、Ｐ１としたものは、本遺構に伴う柱穴の可能性がある。底面からの深さは、約20cmである。

〔埋土の状況〕　土層断面をみるとII層が本遺構にのっていることから、掘り込み面はIIIないしIV層ということになる。

〔出土遺物〕　土器片（胴部）２点が出土した。

ＳＫ23・24・25土坑（第22図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ44グリッド地山面でプランを検出した。ＳＫ23と24、ＳＫ24と25はそれぞれ重複している。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は、23、24が楕円形に近く、25は不整形である。断面は、何れも逆台形と思われる。

〔規模〕　ＳＫ23は、長軸76cm、短軸55cm、確認面からの深さ約12cmである。

ＳＫ24は、長軸86cm、短軸57cm、確認面からの深さ８～11cmである。

ＳＫ25は、81×100cm、確認面からの深さ18～24cmである。

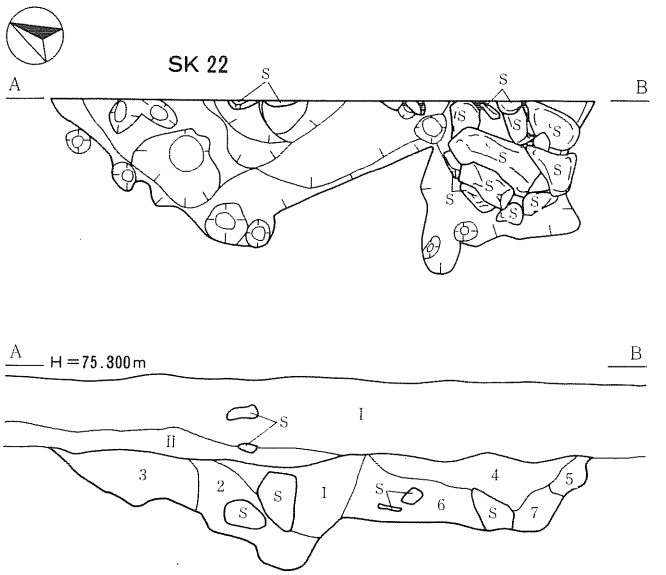
〔底面の状況〕　ＳＫ24に木根によるものと思われるピット状の落ち込みが認められるほか、ほぼ平坦である。

〔埋土の状況〕　断面の観察から、ＳＫ24が23及び25に切られており、ＳＫ24が３基の土坑のうち最も古い時期のものと推測される。

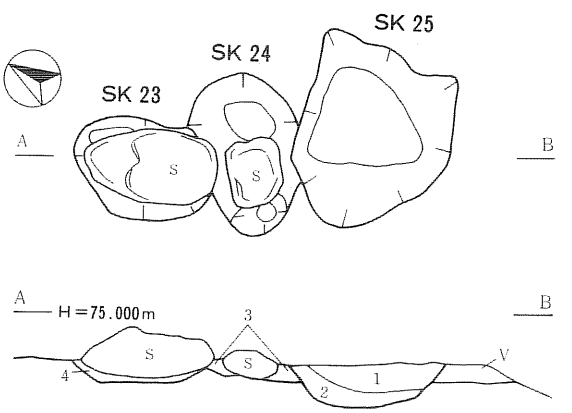
〔出土遺物〕　ＳＫ23、ＳＫ25埋土から土器片が出土したが、小破片のため掲載できなかった。

ＳＫ26土坑（第22図、図版７）

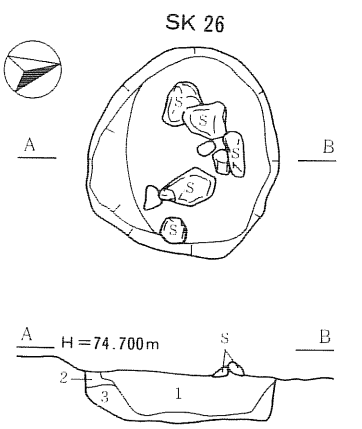
〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ44グリッド地山面でプランを検出した。ＳＩ16の東側約１ｍに位置する。



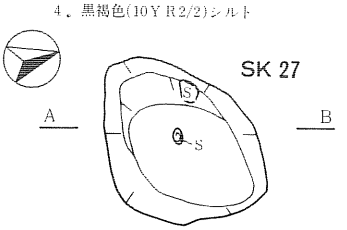
1．黒色(10Y R2/1)シルト。地山粒、炭混入。しまりやや弱い、粘性あり。
2．黒褐色(10Y R2/2)シルト。地山粒、地山小ブロックやや多く混入。しまり強い、粘性余りなし。
3．黒褐色(10Y R3/2)シルト。地山粒、礫混入。しまりあり、粘性なし。
4．黒褐色(10Y R2/2)シルト。地山粒、同ブロック、炭混入。しまりやや弱い、粘性なし。
5．暗褐色(10Y R3/4)粘土～シルト。地山細粒多く混入。しまりやや弱い。
6．黒褐色(10Y R2/3)シルト。地山粒多量、同ブロック、炭混入。しまり強い、粘性なし。
7．黒褐色(10Y R3/2)シルト。地山粒、炭、礫混入。しまりやや弱い、粘性なし。

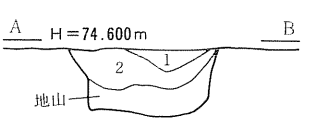


1．黒褐色(10Y R2/2)シルト。地山粒少量混入。しまりやや弱い。
2．黒褐色(10Y R3/2)シルト。地山粒、同ブロック混入。しまり強い。
3．黒褐色(10Y R2/3)シルト。地山粒やや多く混入。しまりやや弱い。
4．黒褐色(10Y R2/2)シルト



1．黒褐色(10Y R2/2)シルト。礫少量混入。しまり、粘性若干あり。
2．明黄褐色(10Y R6/6)粘土。地山粒からなる。しまり、粘性あり。
3．黒褐色(10Y R2/3)シルト。地山粒少量混入。しまり若干あり、粘性なし。





1．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒少量混入。しまり強い、粘性なし。
2．灰黄褐色(10Y R4/2) シルト。地山粒少量、礫混入。しまり強い、粘性なし。

0　1 m

第22図　SK 22・SK 23・SK 24・SK 25・SK 26・SK 27 土坑実測図

〔平面及び断面の形態〕　平面形は、やや歪みはあるものの円形である。断面形は、鍋底状である。

〔規模〕　100×113cm、確認面からの深さ24～27cmである。

〔底面の状態〕　ほぼ平坦であるが、北側は比較的緩く傾斜したのちほぼ垂直の立ち上がりへと移行していく。

〔埋土の状況〕　３層に分けられ、１層中に長さ15cm又は25cmの礫を含む。

〔出土遺物〕　土器片（胴部）１点が出土した。

ＳＫ27土坑（第22図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ43・44グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は、楕円形に近い。断面形は、逆台形状である。

〔規模〕　長軸方向105cm、短軸方向78cm、深さ19～22cmである。

〔底面の状況〕　かなり掘りすぎてしまい、本来の底面とは異なってしまった。本来の底面は、ゆるく波をうつような状態だったと推測される。

〔埋土の状況〕　２層に分けられ、２層中には礫を含む特徴がある。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ28土坑（第23図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＥ45グリッド地山面でプランを検出した。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は不整形、断面形は皿状である。

〔規模〕　南北方向118cm、東西方向116cm、確認面からの深さ15cm前後である。

〔底面の状況〕　地山に含まれる礫が露出しているところも若干認めれるが、ほぼ平坦である。

〔埋土の状況〕　２層に分けられた。第１層中には炭が含まれている。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ30土坑（第23・29・31図、図版７）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＥ45グリッド地山面でプランを検出した。ＳＩ16の北約１ｍに位置する。

〔平面及び断面の形態〕　平面形はやや歪な円形、断面形は鍋底状である。

〔規模〕　115×127cm、確認面からの深さ35～40cmである。

〔底面の状況〕　あげ底状に中央部が高くなっており、地山に含まれる礫が多数露出している。

〔埋土の状況〕　３層に分けられ、１層と３層に礫を含む特徴がある。

〔出土遺物〕　土器片30点、石器１点が出土した。土器については、地文のみのもの又は無

文のものが多く、掲載できたのは一部にすぎない。55・56は、口縁部の資料である。いずれも波状口縁の土器であり、55の口縁端は強く外反している。57は、刻目文と磨消し手法が施された頸部の資料である。60は、57と同一個体と思われる。61は、ＳＩ16竪穴住居跡出土の31・32・34と同一個体と考えられる。

石器は、87の磨製石斧である。中央部あたりから折損している。

ＳＫＦ35フラスコ状土坑（第23図）

〔検出位置・検出状況〕　ＳＤ18溝状遺構を調査中、土層観察の際にその存在が明らかになった。検出位置は、ＭＤ44・45グリッドである。プランの半分近くが調査範囲外にある。また、ＳＤ18溝状遺構に切られている。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は円形と推測され、断面形はフラスコ状である。

〔規模〕　推定口径60cm、深さ約65cmである。

〔底面の状況〕　ほぼ平坦であり、調査が可能であった範囲からはピット等は検出されなかった。

〔埋土の状況〕　６層に分けられ、黒色系の土で占められていることから、壁面の崩落がほとんどなかったものと推測される。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ39土坑（第23図）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ43グリッド地山面でプランを検出した。中山沢に臨む斜面の肩口に位置し、地山は南東側に緩く傾斜している。

〔平面及び断面の形態〕　東西にやや長い不整円形であり、断面は南側立ち上りが失われているが、鍋底状と推測される。

〔規模〕　北東―南西方向100cm、それと直交する方向80cm、確認面からの深さ10～13cmである。

〔底面の状況〕　ほぼ平坦である。

〔埋土の状況〕　プラン確認時に上部を削ったため、黒色土１層を認めるに留まった。

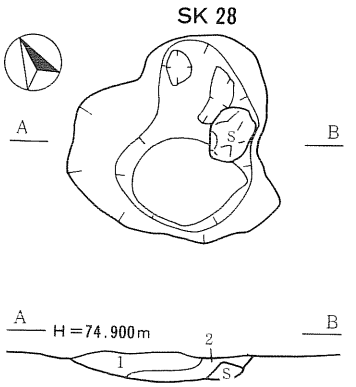
〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ40土坑（第23図）

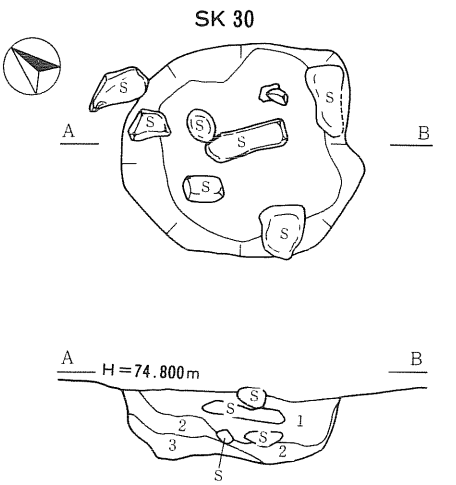
〔検出位置・検出状況〕　ＭＦ43グリッド地山面でプランを検出した。ＳＫ39の南隣りにあり、すべての遺構の中で最も中山沢よりに位置する。

〔平面及び断面の形態〕　北東―南西方向に長軸を有する楕円形に近く、断面形は凹凸が著しく、不整形である。

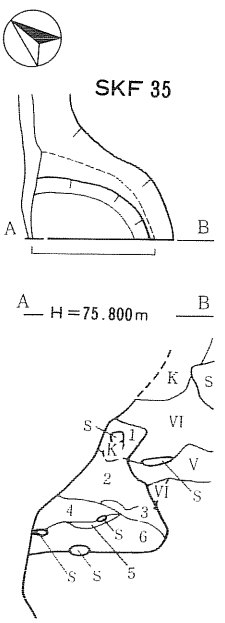
〔規模〕　長軸方向116cm、短軸方向80cm、確認面からの深さ７～18cmである。



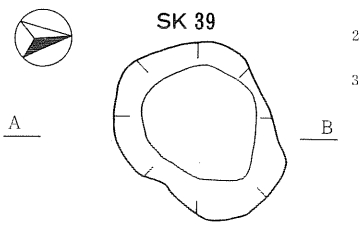
1．黒褐色(10Y R2/3) シルト。地山粒、炭、礫混入。しまりやや弱い、粘性なし。
2．黒色(10Y R1.7/1) シルト。地山粒少量混入。しまり弱い、粘性あり。



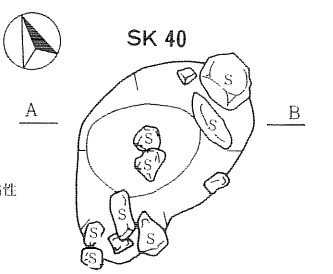
1．黒色(10Y R2/1)シルト。地山粒、軽石粒少量、礫混入。しまり強い。
2．暗褐色(10Y R3/4)シルト。地山粒混入。しまり、粘性あり。
3．黒褐色(10Y R2/2)シルト。礫を含みゴツゴツしている。粘性あり。

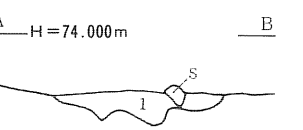


1．黒色(10Y R1.7/1)シルト。地山粒、炭混入。しまりやや弱い、粘性あり。
2．黒色(10Y R2/1)シルト。地山粒、同ブロック混入。しまりやや弱い、粘性あり。
3．黒褐色(10Y R2/3)シルト。地山粒混入。しまり強い、粘性あり。
4．黒褐色(10Y R2/2)シルト。地山粒、炭混入。しまりやや弱い、粘性あり。
5．黒褐色(10Y R3/1)シルト。地山粒やや多く混入。粘性あり。
6．黒褐色(10Y R3/2)シルト。地山ブロック混入。しまり、粘性あり。

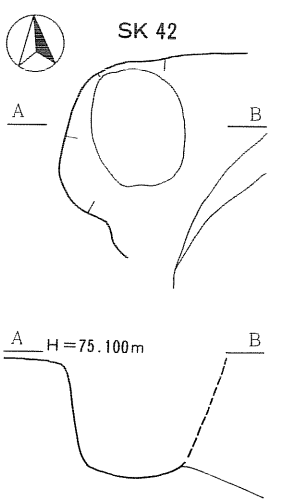


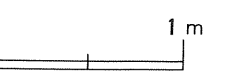
1．黒色(10Y R2/1) シルト。地山粒微量混入、しまり弱い、粘性強い。





1．黒褐色(10Y R2/2)シルト。地山粒少量、炭化物微量混入。





第23図　SK 28・SK 30・SKF 35・SK 39・SK 40・SK 42 土坑実測図

〔底面の状況〕　断面形の項で述べたように、凹凸が著しい。

〔埋土の状況〕　炭化物を含む黒褐色土１層であるが、礫をやや多く含む。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

ＳＫ42土坑（第23図）

〔検出位置・検出状況〕　ＳＤ18溝状遺構を調査中にＭＥ47グリッドで検出した。本遺構の存在に気がついたのは、完掘の状態になってからであった。したがって、土層断面図を掲載することができなかった。

〔平面及び断面の形態〕　平面形は円形、断面形は逆台形と推測される。

〔規模〕　推定径90cm、確認面からの深さ57～63cmである。

〔底面の状況〕　ほぼ平坦で、中央部が少しくぼんでいる。

〔出土遺物〕　遺物は、出土しなかった。

２．時期不明

時期不明とした遺構としては、溝状遺構１条がある。土層観察の結果、掘りこみ面がⅢ層とした大湯浮石を含む層の上面に認められた。したがって、平安時代以降の時期が考えられる。しかし、時期を特定することができないことから、時期不明として掲載した。

ＳＤ18溝状遺構（第24・29図、図版８）

〔検出位置・検出状況〕　ＭＤ45・46、ＭＥ45・46・47グリッドⅣ層中において人頭大の礫を多数検出したのち、地山面で溝状のプランを検出した。

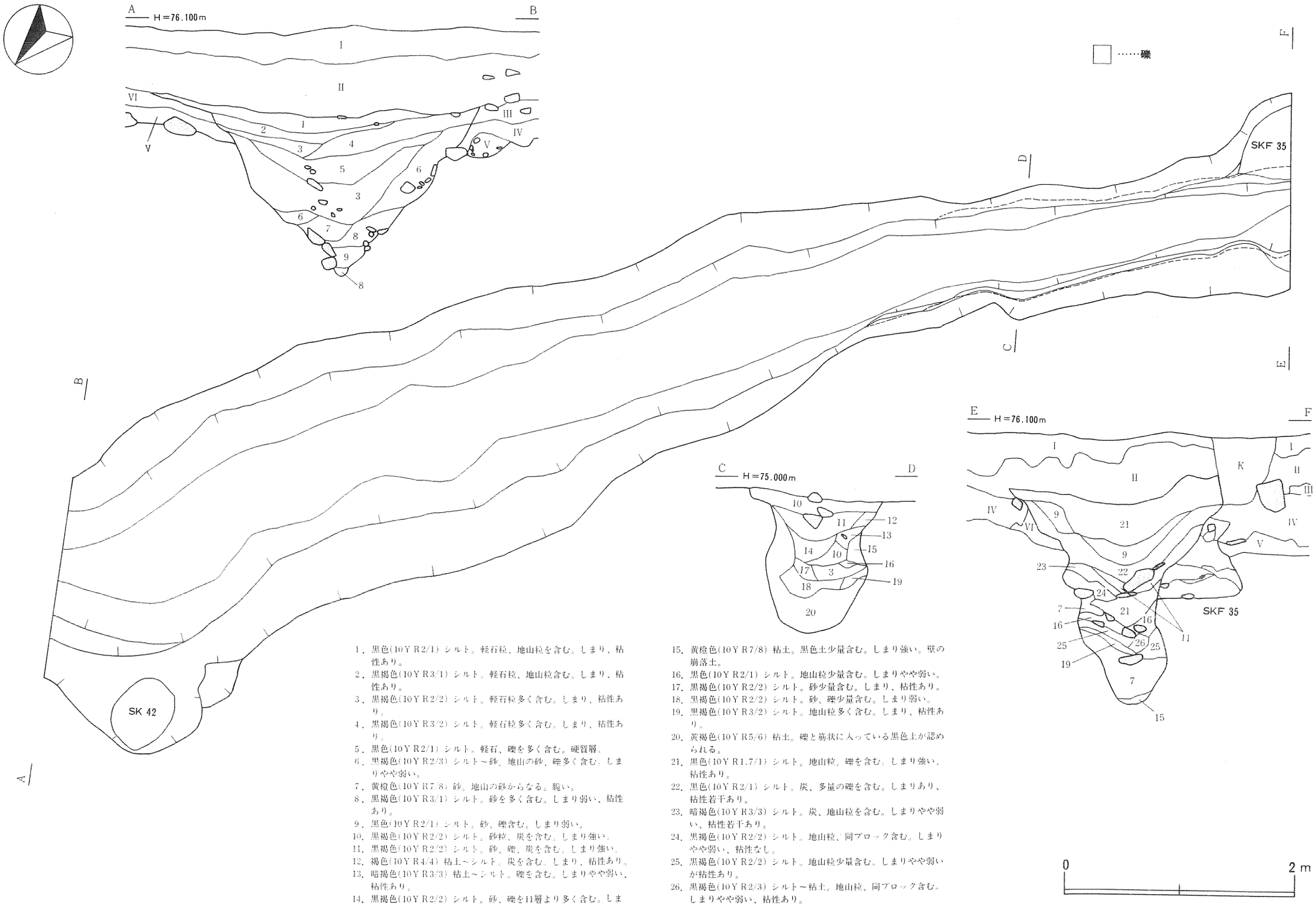
〔平面及び断面の形態〕　平面形は、北東―南西方向に調査区を横切るように帯状を呈している。断面形は、Ｖ字状又は逆三角形と推測されるが、壁面の崩落あるいは侵食により、場所によっては袋状となっている。

〔規模〕　調査が可能であった溝の長さは11m20cmである。幅は、北東で200cm前後と広く、南西になるにしたがい100cm前後と狭くなり、調査境界に近くなると150cmと再び広くなる傾向がある。本遺構は、Ⅲ層上面から掘り込まれているものと推測されるが、その面からの深さは150～190cmになる。

〔底面の状況〕　底面の地山は、粘土というよりはむしろ砂・礫を多く含むものであり、いたるところに礫が露出してゴツゴツしている。

〔埋土の状況〕　地山粒又は軽石粒を含む黒色及び黒褐色の土が大半を占めているが、底面に近い部分や壁際には地山の崩落と思われる黄褐色土が認められる。

〔出土遺物〕　口縁部破片18点、胴部破片170点余り、底部破片11点が出土したが、小破片ないしは無文のものが多く、掲載したのは11点である。62～65は、口縁部破片である。沈線が引かれるもの（62）、沈線間に櫛目状の文様が施されるもの（64）、口縁直下に縄の側面



1．黒色(10Y R2/1) シルト。軽石粒、地山粒を含む。しまり、粘性あり。
2．黒褐色(10Y R3/1) シルト。軽石粒、地山粒含む。しまり、粘性あり。
3．黒褐色(10Y R2/2) シルト。軽石粒多く含む。しまり、粘性あり。
4．黒褐色(10Y R3/2) シルト。軽石粒多く含む。しまり、粘性あり。
5．黒色(10Y R2/1) シルト。軽石、礫を多く含む。硬質層。
6．黒褐色(10Y R2/3) シルト～砂。地山の砂、礫多く含む。しまりやや弱い。
7．黄橙色(10Y R7/8) 砂。地山の砂からなる。脆い。
8．黒褐色(10Y R3/1) シルト。砂を多く含む。しまり弱い、粘性あり。
9．黒色(10Y R2/1) シルト。砂、礫含む。しまり弱い。
10．黒褐色(10Y R2/2) シルト。砂粒、炭を含む。しまり強い。
11．黒褐色(10Y R2/2) シルト。砂、礫、炭を含む。しまり強い。
12．褐色(10Y R4/4) 粘土～シルト。炭を含む。しまり、粘性あり。
13．暗褐色(10Y R3/3) 粘土～シルト。礫を含む。しまりやや弱い、粘性あり。
14．黒褐色(10Y R2/2) シルト。砂、礫を11層より多く含む。しまりやや弱い。
15．黄橙色(10Y R7/8) 粘土。黒色土少量含む。しまり強い。壁の崩落土。
16．黒色(10Y R2/1) シルト。地山粒少量含む。しまりやや弱い。
17．黒褐色(10Y R2/2) シルト。砂少量含む。しまり、粘性あり。
18．黒褐色(10Y R2/2) シルト。砂、礫少量含む。しまり弱い。
19．黒褐色(10Y R3/2) シルト。地山粒多く含む。しまり、粘性あり。
20．黄褐色(10Y R5/6) 粘土。礫と筋状に入っている黒色土が認められる。
21．黒色(10Y R1.7/1) シルト。地山粒。礫を含む。しまり強い、粘性あり。
22．黒色(10Y R2/1) シルト。炭、多量の礫を含む。しまりあり、粘性若干あり。
23．暗褐色(10Y R3/3) シルト。炭、地山粒を含む。しまりやや弱い、粘性若干あり。
24．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒、同ブロック含む。しまりやや弱い、粘性なし。
25．黒褐色(10Y R2/2) シルト。地山粒少量含む。しまりやや弱いが粘性あり。
26．黒褐色(10Y R2/3) シルト～粘土。地山粒、同ブロック含む。しまりやや弱い、粘性あり。

第24図　ＳＤ18溝状遺構実測図

圧痕が行われるもの（63・65）がある。なお、63と65は同一個体と思われる。また、64及び63・65の口縁は、波状になるようである。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。66～69・71は、胴部破片である。いずれも沈線により文様が構成されている。68と71は沈線間に縄文が充塡され、66は壷形土器と思われるが、64同様櫛目状の文様が施されている。70は、底部の資料であり、器形は底部の張りがやや強いものである。

第３節　遺構外出土遺物

遺構外出土の遺物は、土器、土製品、石器に大別される。以下に個々の遺物について述べていきたい。

１．土器（第32～37図）

出土した土器は、縄文前期・中期・後期、弥生時代のものであるが、このうち縄文後期が大部分を占める。

第Ⅰ群土器　　縄文前期及び中期の土器（97・98）

出土点数が少ないので、本群に両時期のものをまとめて掲載する。97は、深鉢形土器の口縁部である。縄の側面圧痕が施されている。98も深鉢形土器の口縁部であり、粘土紐貼り付けによる隆帯上に縄の側面圧痕を施し、さらに隆帯に沿って縄の側面圧痕を施している。

第Ⅱ群土器　　縄文後期の土器

１類　地文上に沈線で文様が施されるもの（88・108・122）

88は、ＲＬ縄文を胴部上半まで施文し、口縁部に沈線を施している。器高38.1cm、口径27.4cm、底径12.8cmである。

２類　主に沈線により文様が施されるもの（99・106・109・116・117）

116は、縦方向に施文した後、横方向に施文している。そして、再び縦方向にやや深めの沈線を１条施文している。

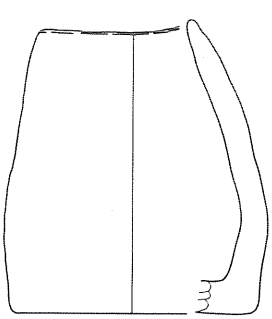
３類　沈線間に櫛目状の文様が施されるもの（105・118・124・125）

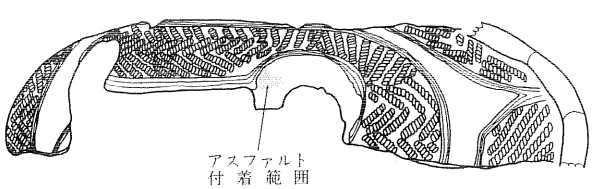
４類　磨消縄文手法のもの（100・102～104・109～111・113～115・119～121・123・129・130・132～135）

この中には粘土を隆帯状に貼り付けたり、沈線をより深く施文することによりまわりの粘土を隆帯状に高めたりして、浮き彫りの効果を高めたものがある（111・119・120）。また、縄文原体に比較的細い縄を用いているものがある（129・130・132～135）。129の口縁部には小突起が付けられ、突起上には半裁竹管状の工具により刻みが行われている。

５類　刻目文が施されるもの（126～128・131）

0　（1：3）　10cm

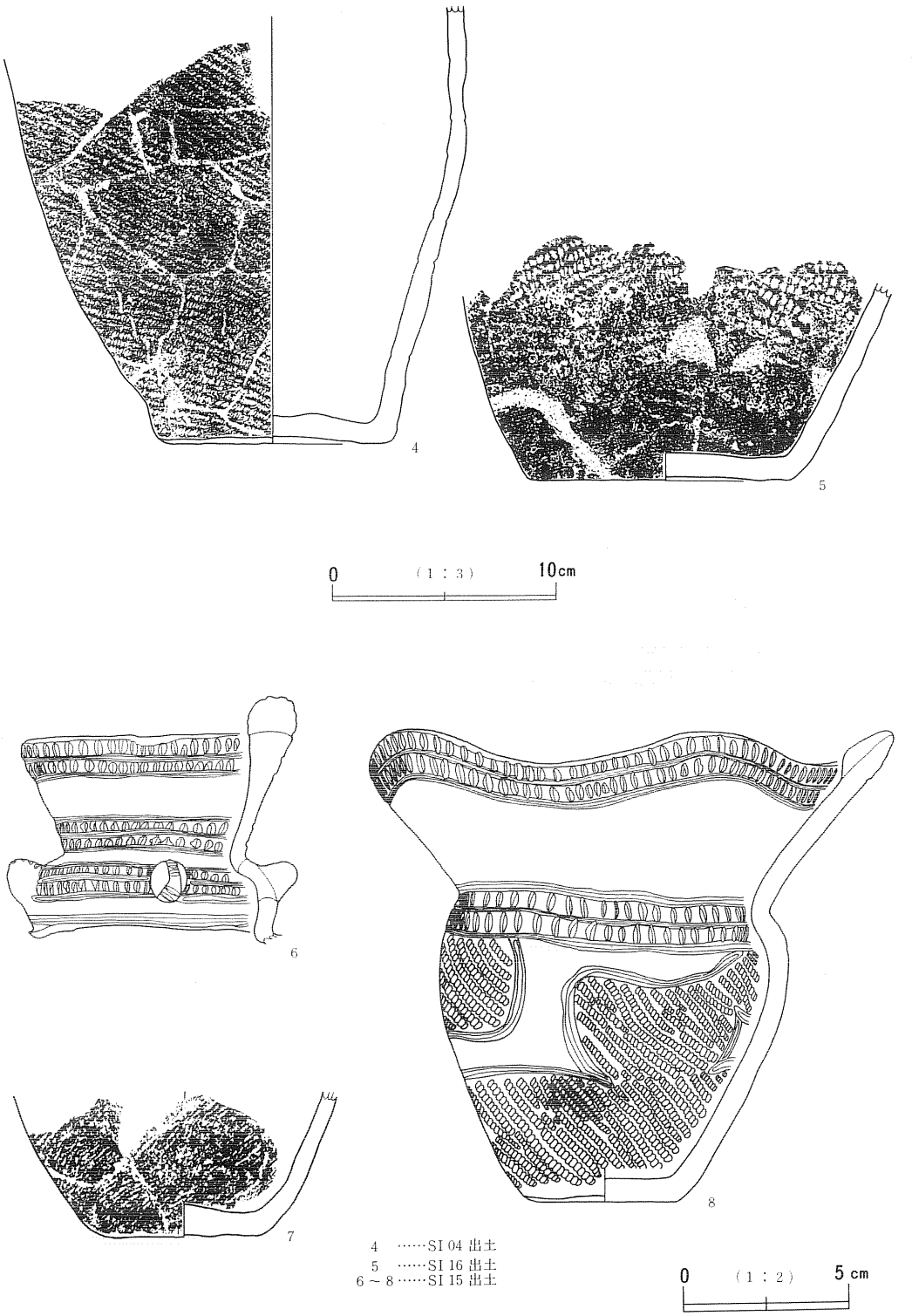




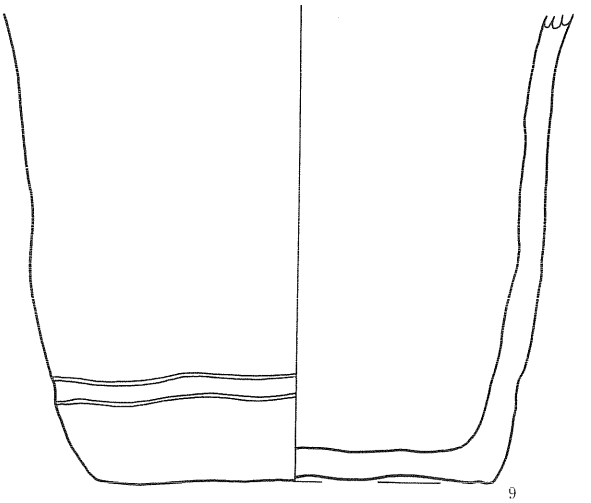
1～2……SI 01 出土
3　……SI 15 出土

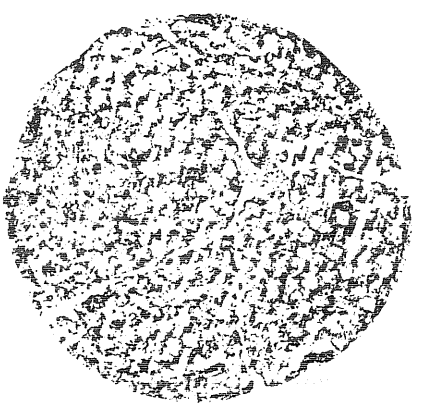
0　（1：2）　5 cm

第25図　遺構内出土土器（1）

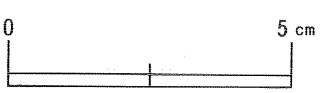


第26図　遺構内出土土器 (2)

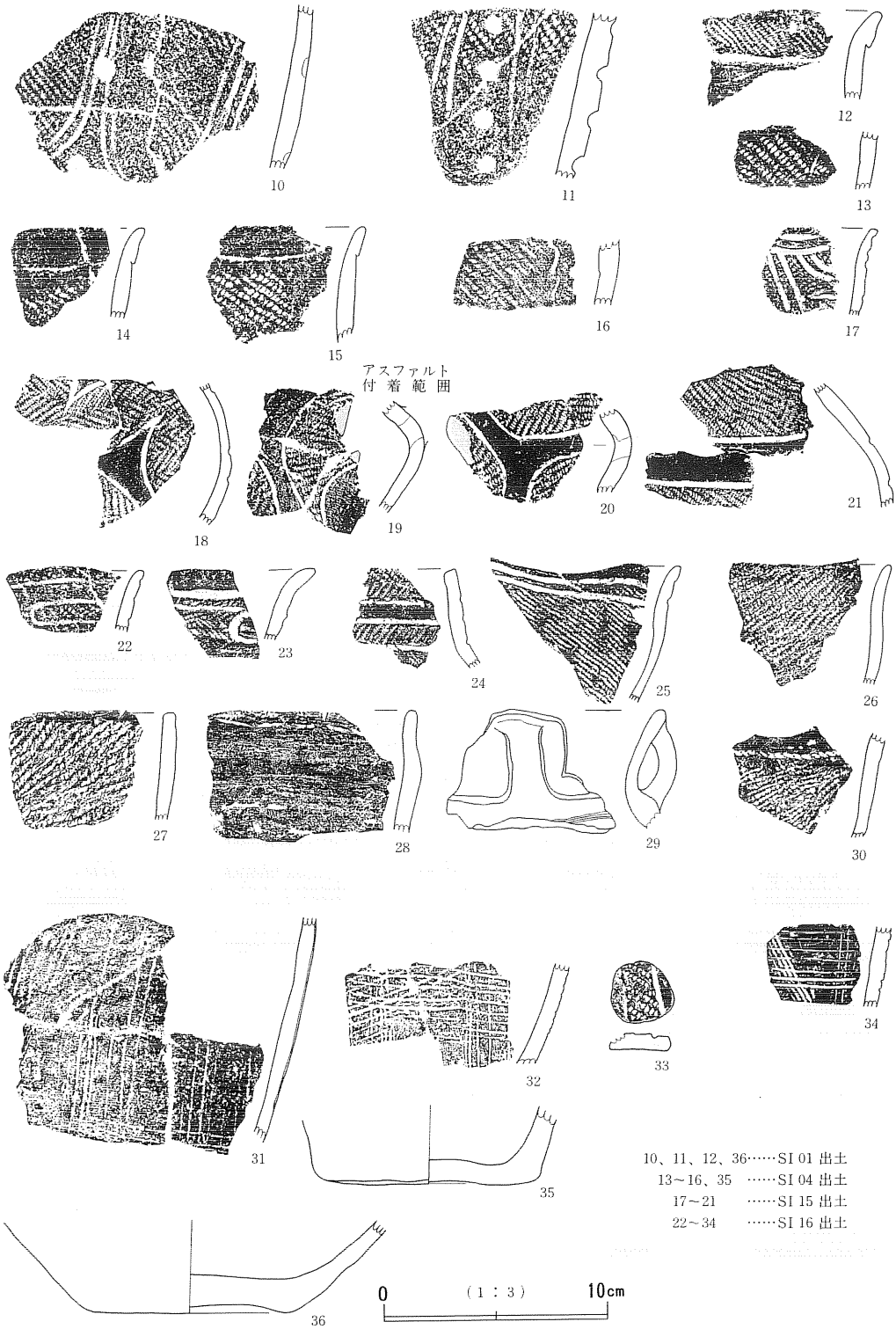




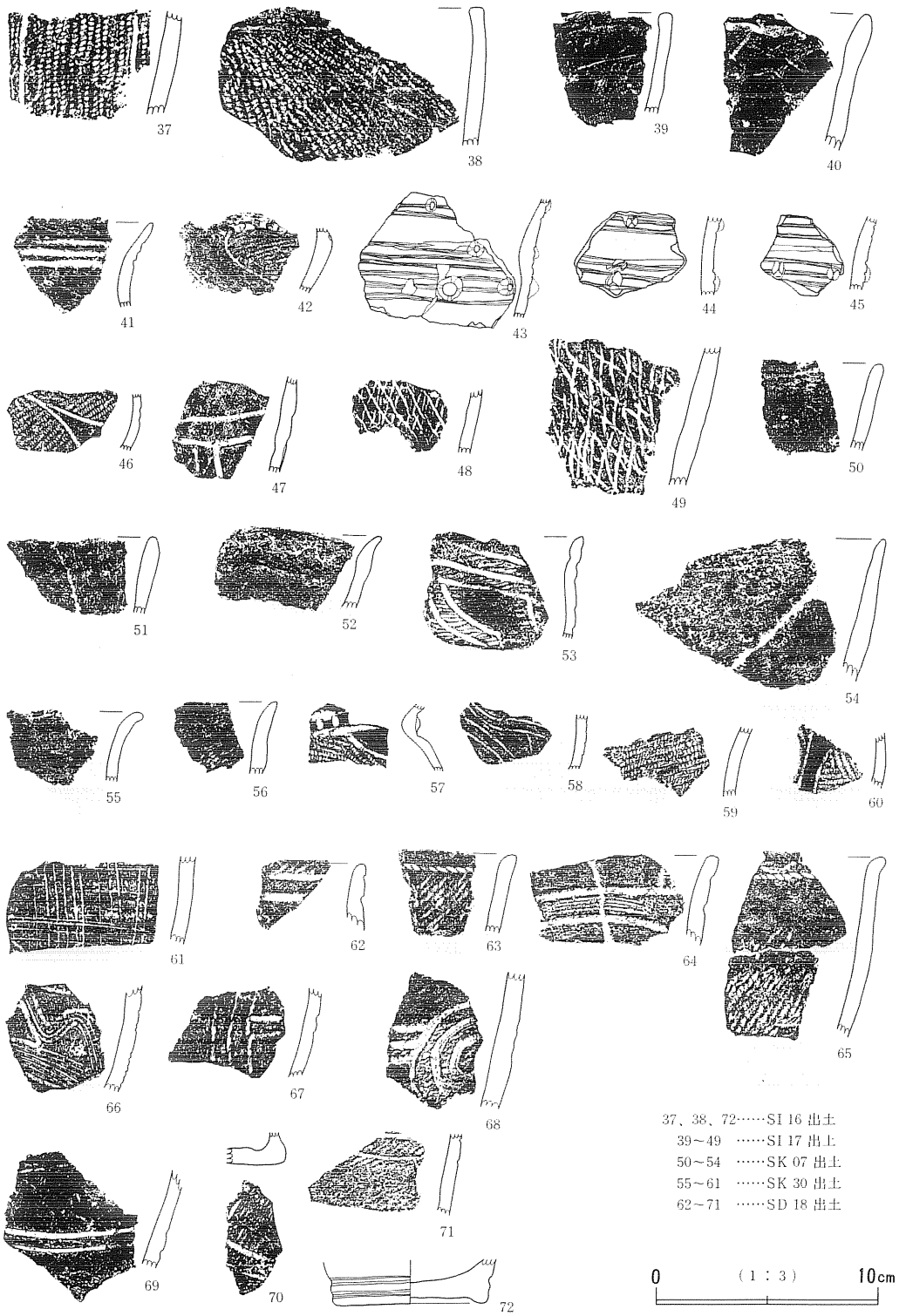
9……SI 17 出土



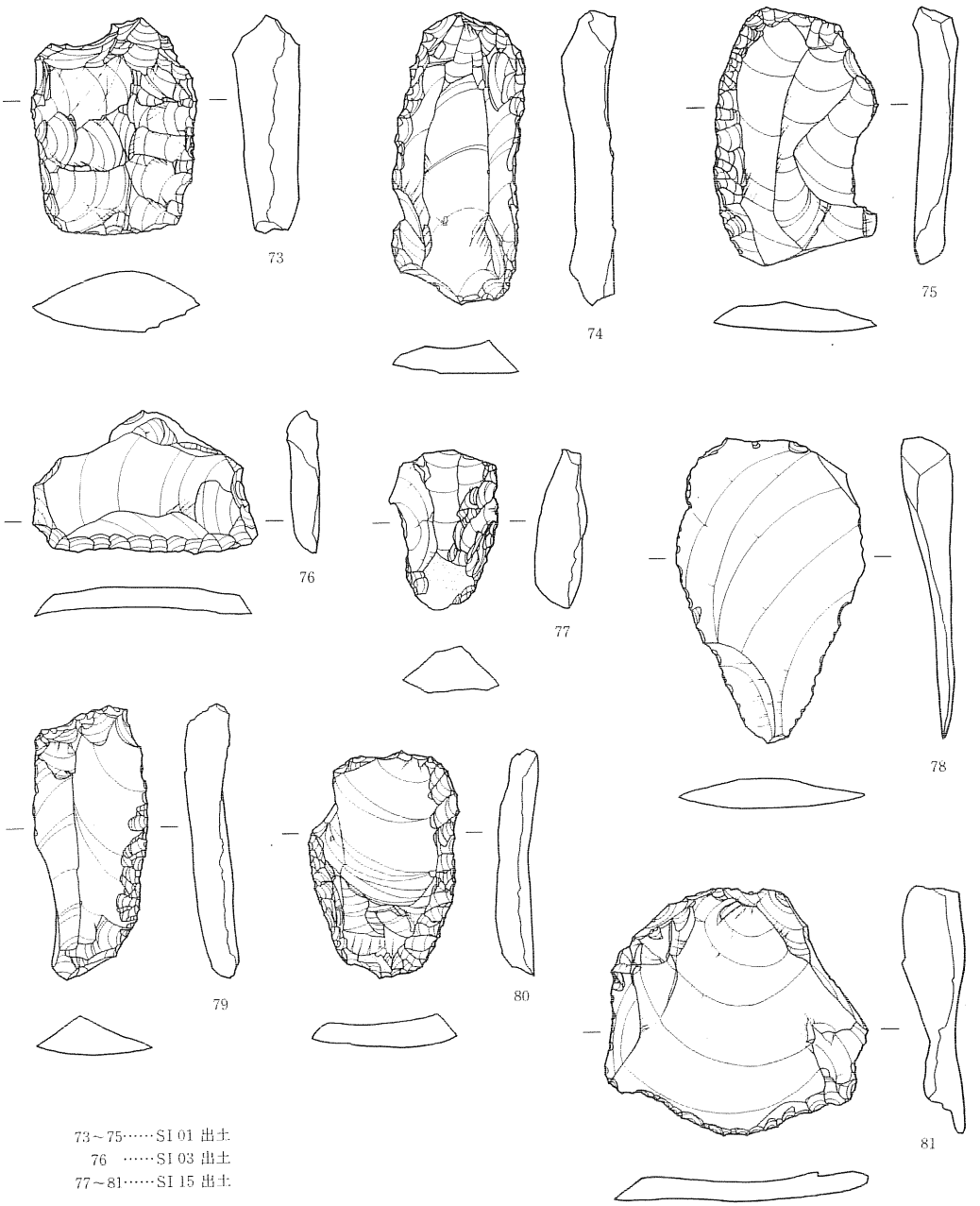
第27図　遺構内出土土器 (3)



第28図　遺構内出土土器 (4)



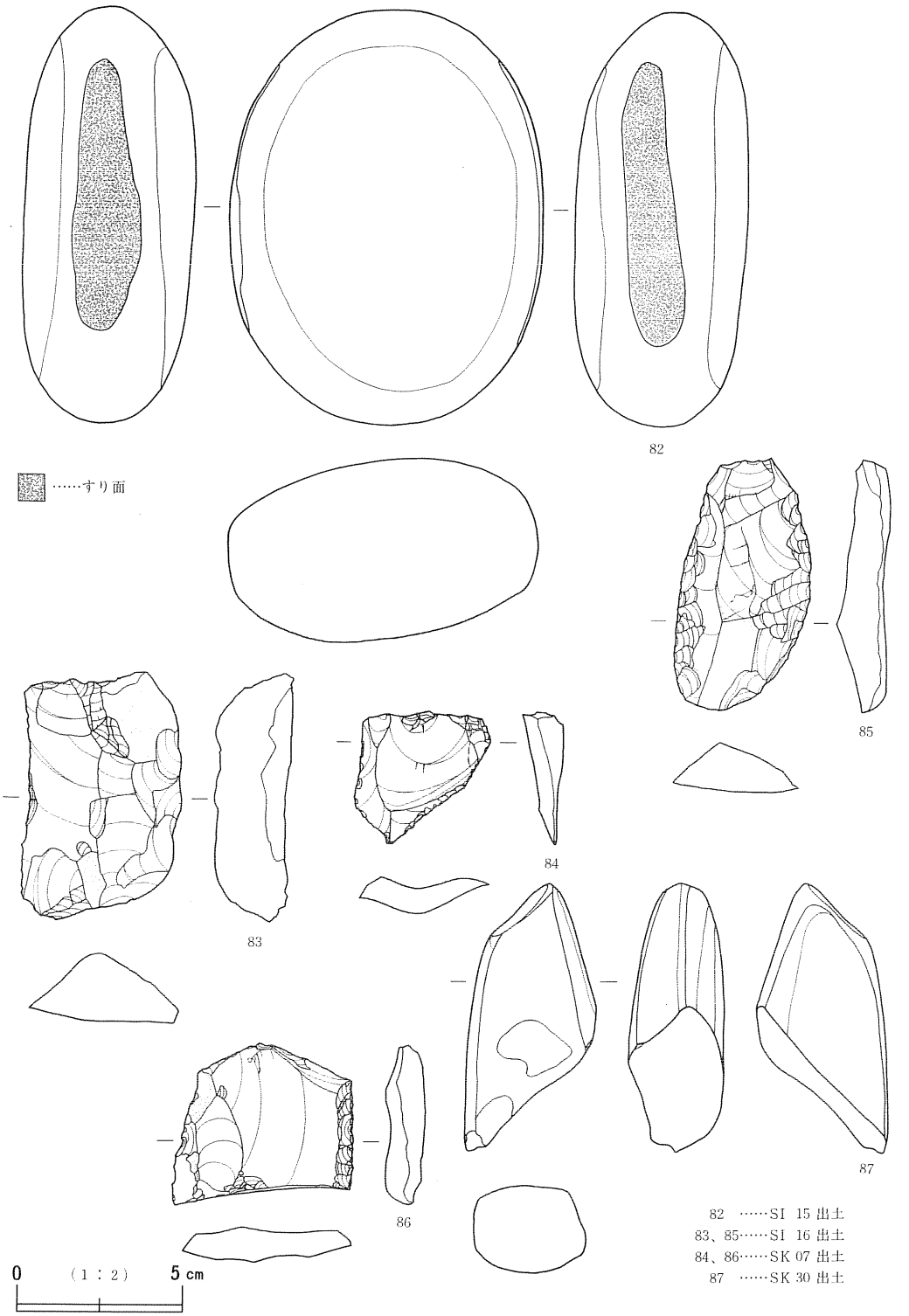
第29図　遺構内出土土器（5）



73～75……SI 01 出土
76　……SI 03 出土
77～81……SI 15 出土

0　（1：2）　5 cm

第30図　遺構内出土石器（1）



第31図　遺構内出土石器（2）

６類　粘土により瘤状の貼り付けが施されるもの（94・136～140）

94は、壺形土器胴部の沈線上に瘤状の粘土を２段に貼り付けている。現有高10cmである。139は、注口土器の注口基部に施文されている。基部から破断面にかけ、アスファルトが付着している。

７類　地文のみのもの又は無文のもの（90・95・141～150）

90は、無節（Ｌ）が施された小型の土器である。外面に煤状炭化物が付着している。現有高11.8cm、推定口径12.6cmである。95は、比較的小さな底部から最大径を有する口縁部まで内湾ぎみに開く深鉢である。口縁部から胴部下半までＬＲ縄文が施文され、底部近くになり無文となる。胴部においては、縄文は斜め方向に回転施文されている。火熱を受けた痕跡が認められ、煤状炭化物は外面では口縁部から胴部にかけて観察され、内面では底部付近に観察される。現有高35cm、口径38.5cmである。原体の側面圧痕が認められるもの（141～143）、穿孔されているもの（152・153）がある。

８類　底部の資料（89・91～93・157～163）

器形としては、底部から自然に立ち上がるものが多いが、若干張り出すものが認められる（91・163）。

第Ⅲ群土器　　弥生土器（96・101）

96は、器形がやや特異であること、器厚が縄文後期の土器にくらべ薄いことなどから、本群に含めたものである。口縁部に１条の沈線が施された壺形の土器である。胎土に砂粒を含み、色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）である。口径10.3cm、現有高28.7cm（図上復元）である。101は、山形文が連続して施文される。

２．土製品（第37図）

土製品は、164・165の円盤状土製品である。縁辺だけでなく、表裏の磨滅も著しい。

３．石器（第38～40図）

（１）剥片石器

定型石器としては石匙が認められ、その他はスクレーパーとして分類した不定型石器である。

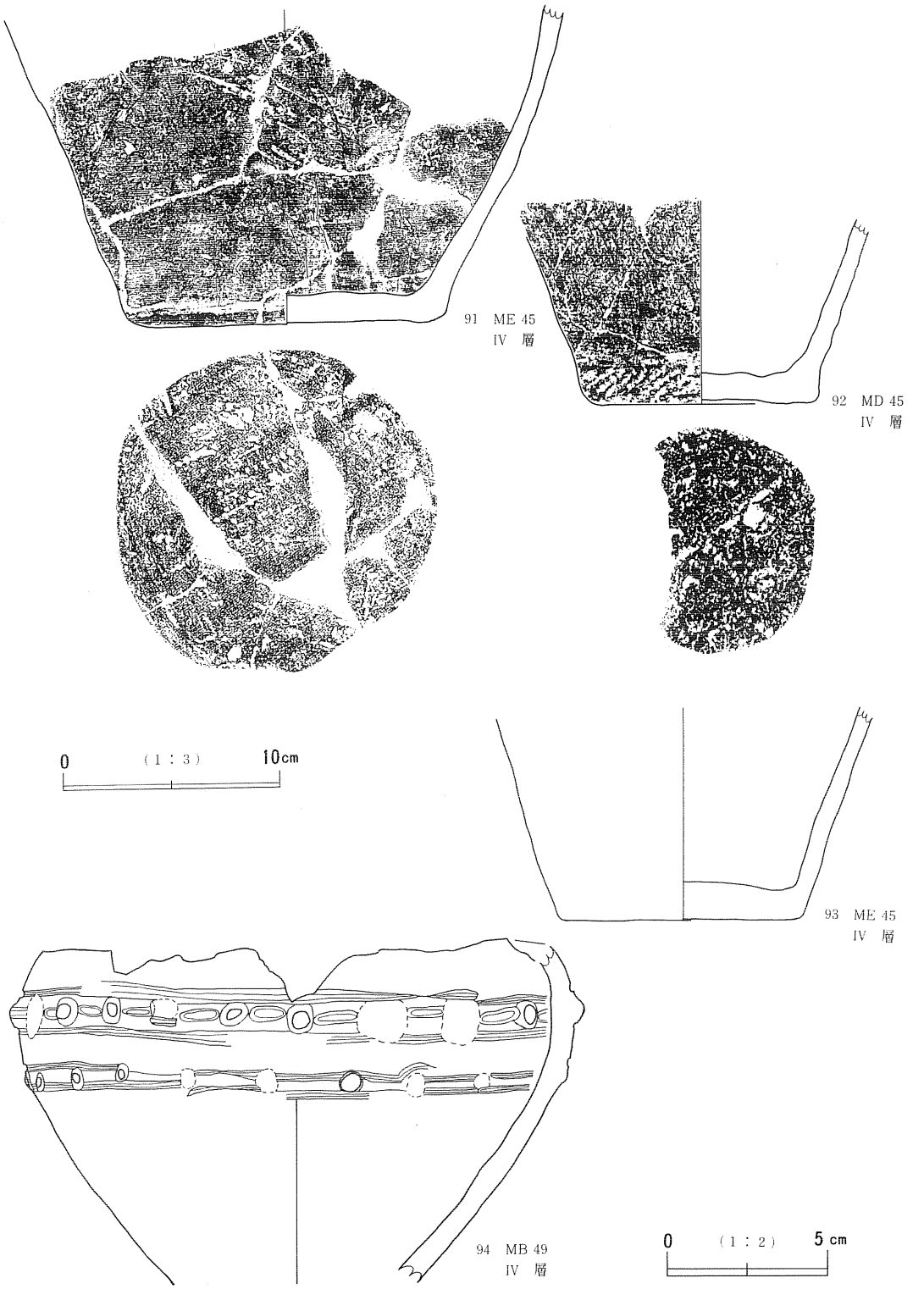
石匙（166～169）　縦型（166～168）と横型（169）がある。

スクレーパー（170～178）　腹面端部に調整を行うもの（170）、腹面の両側縁に調整を行うもの（171～173）、腹面の左側縁と端部に調整を行うもの（174・175）、腹面のすべての縁辺に調整を行うもの（176）、背面及び腹面の両面から調整を行うもの（177・178）に分けられる。

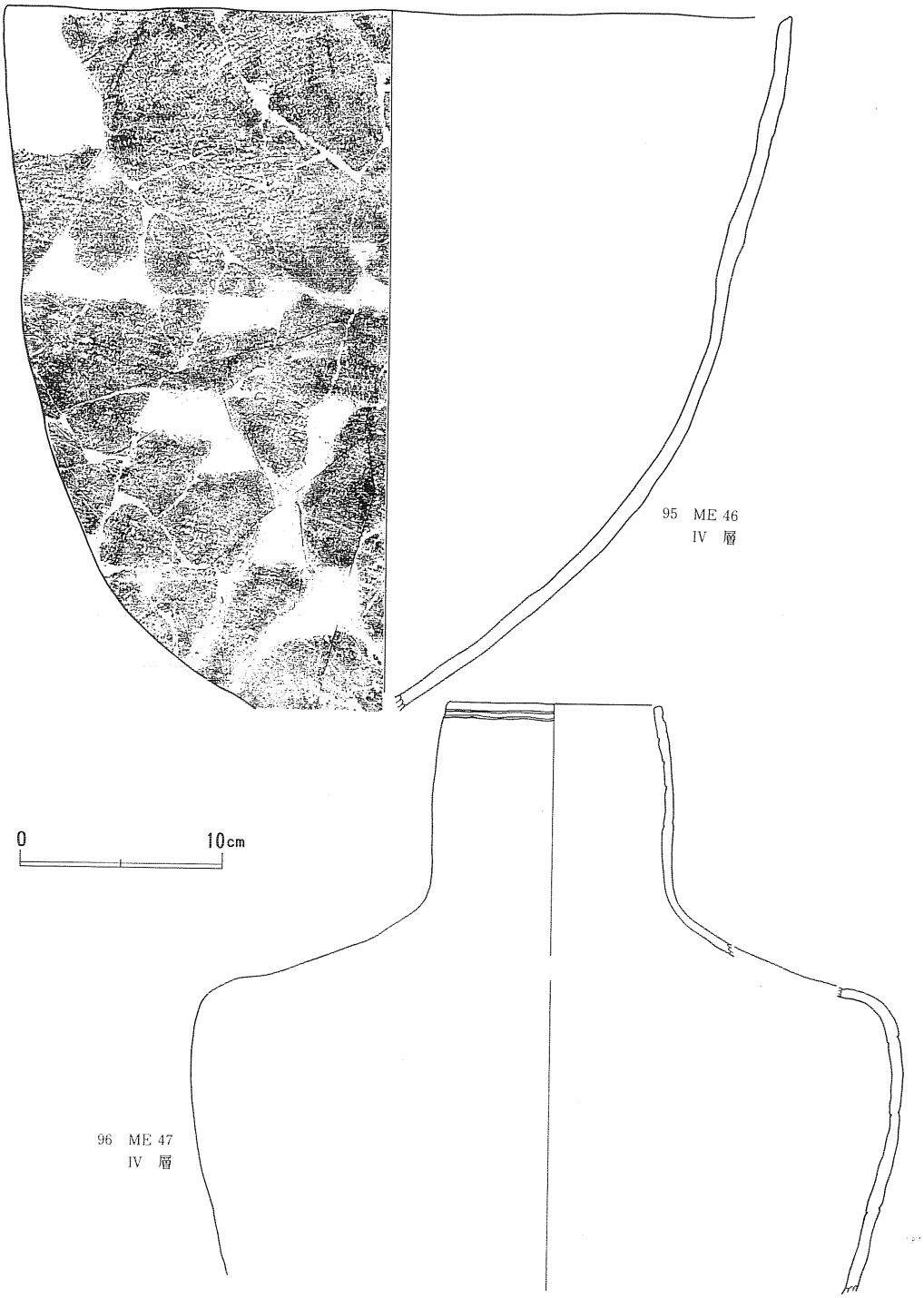
（２）礫石器

磨製石斧、石錘、敲石、石皿に分類された。

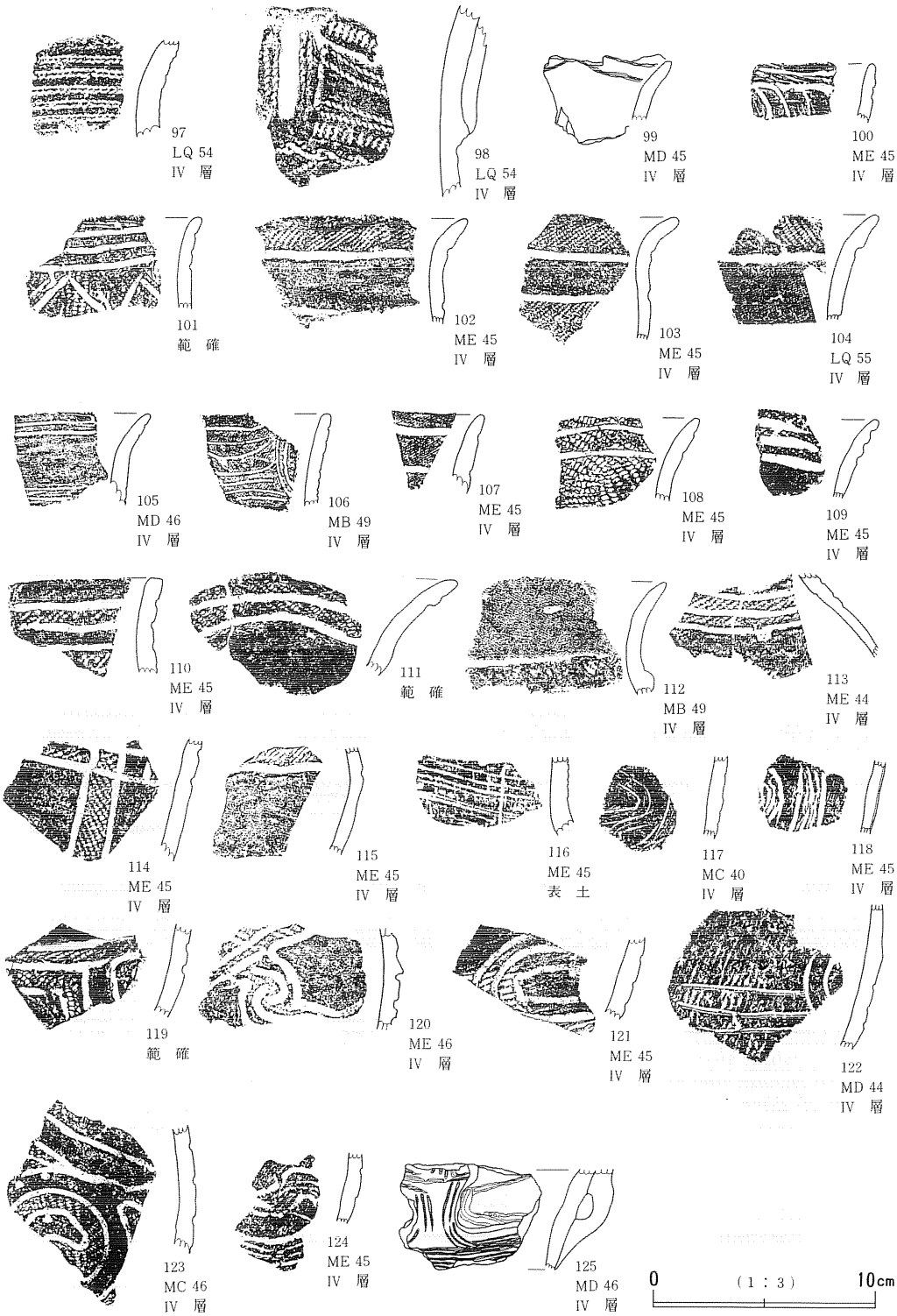
第32図　遺構外出土土器 (1)



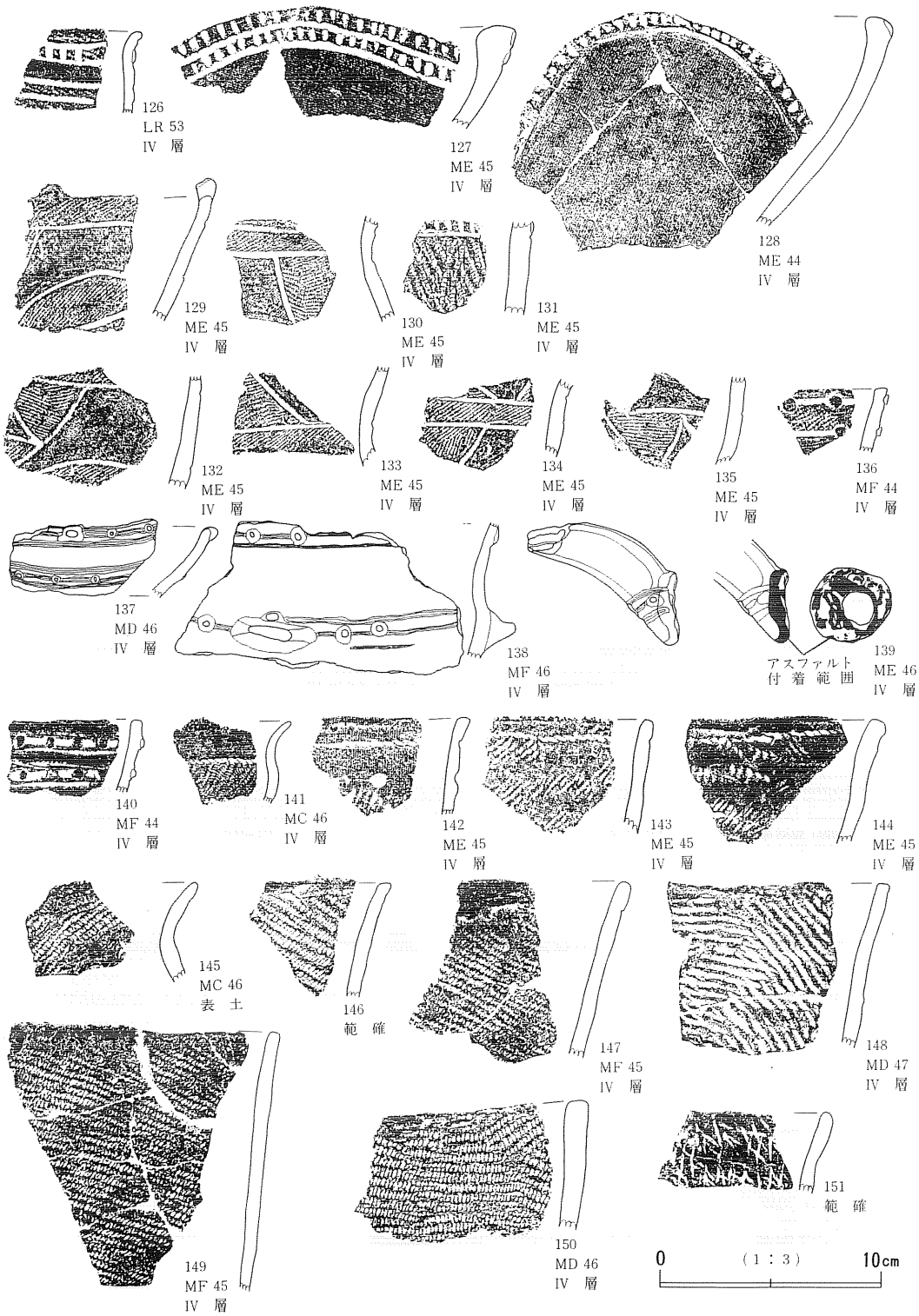
第33図　遺構外出土土器 (2)



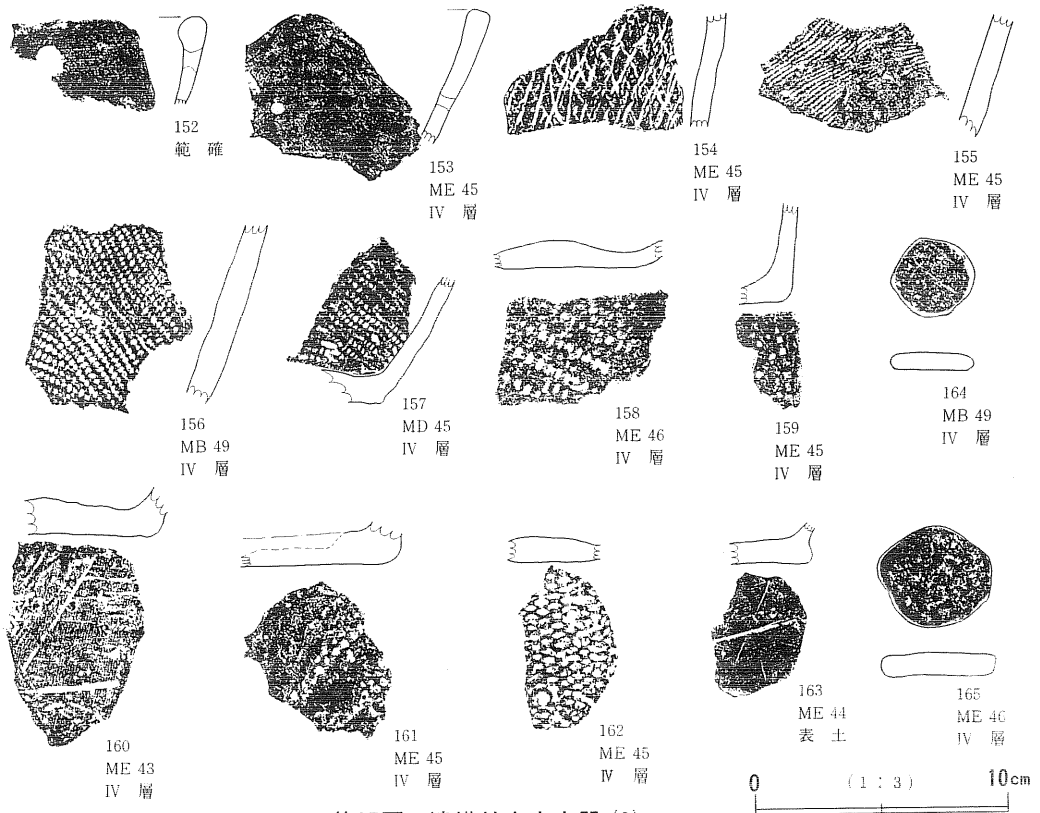
第34図　遺構外出土土器 (3)



第35図　遺構外出土土器 (4)



第36図　遺構外出土土器 (5)



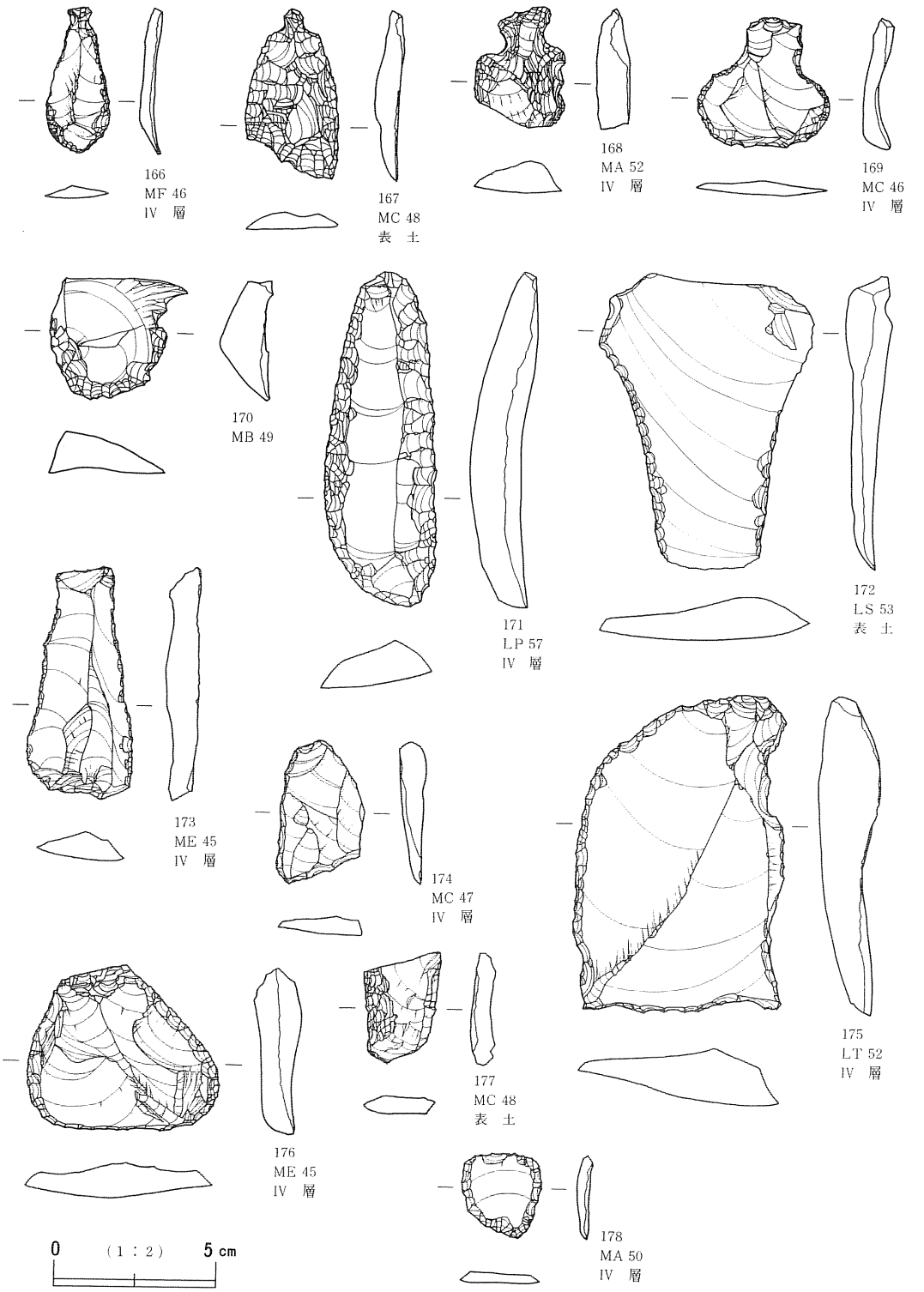
第37図　遺構外出土土器 (6)

磨製石斧（179～182）　途中から折れているか、刃部が欠損するなどして完全なものがない。

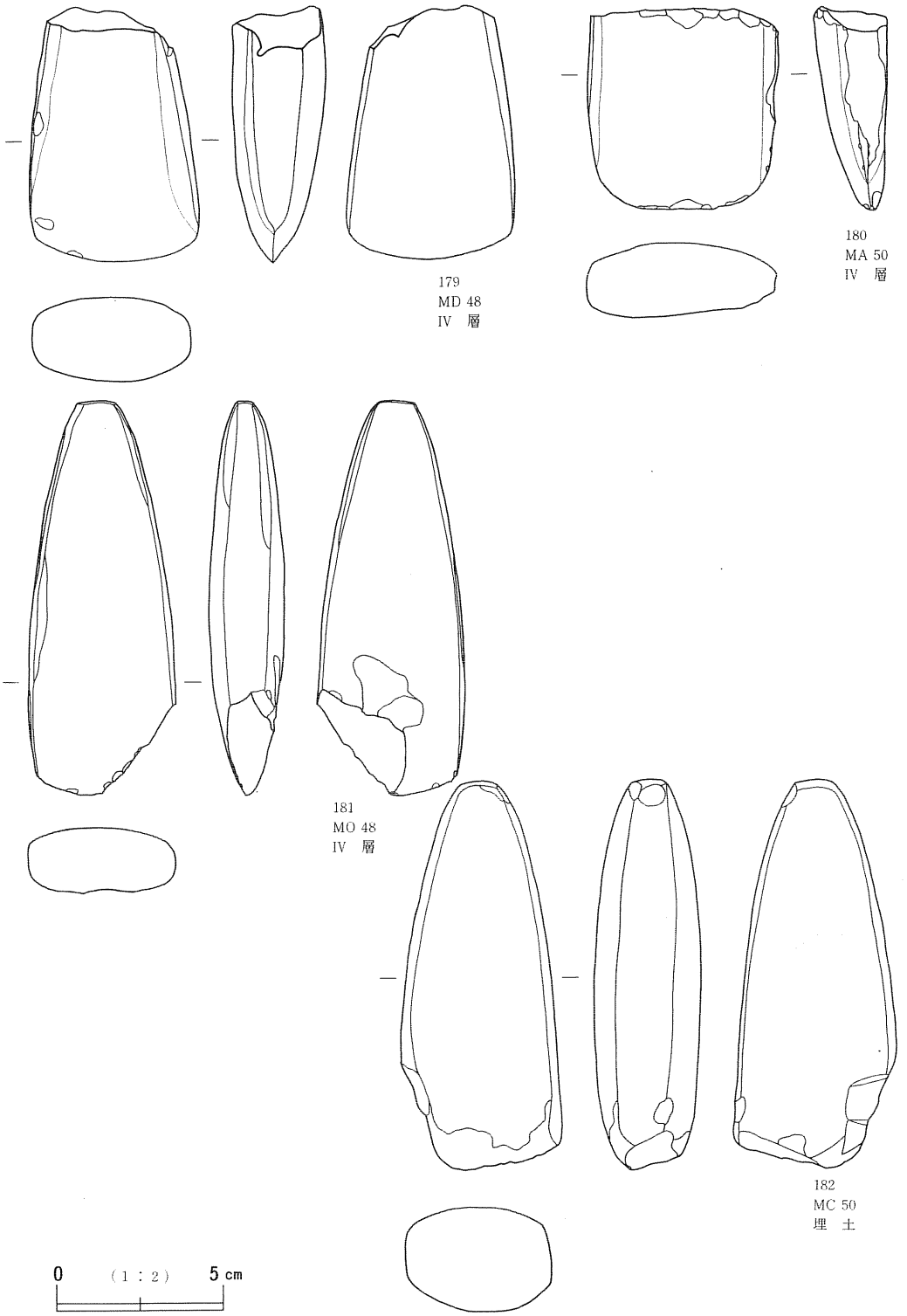
石錘（183）　比較的偏平な礫の長軸方向に平行な辺のほぼ中央部に浅い抉りを入れている。

敲石（184）　細長い偏平な石の端部に敲打面が認められる。また、表裏面には凹石として使われた痕跡がみられる。

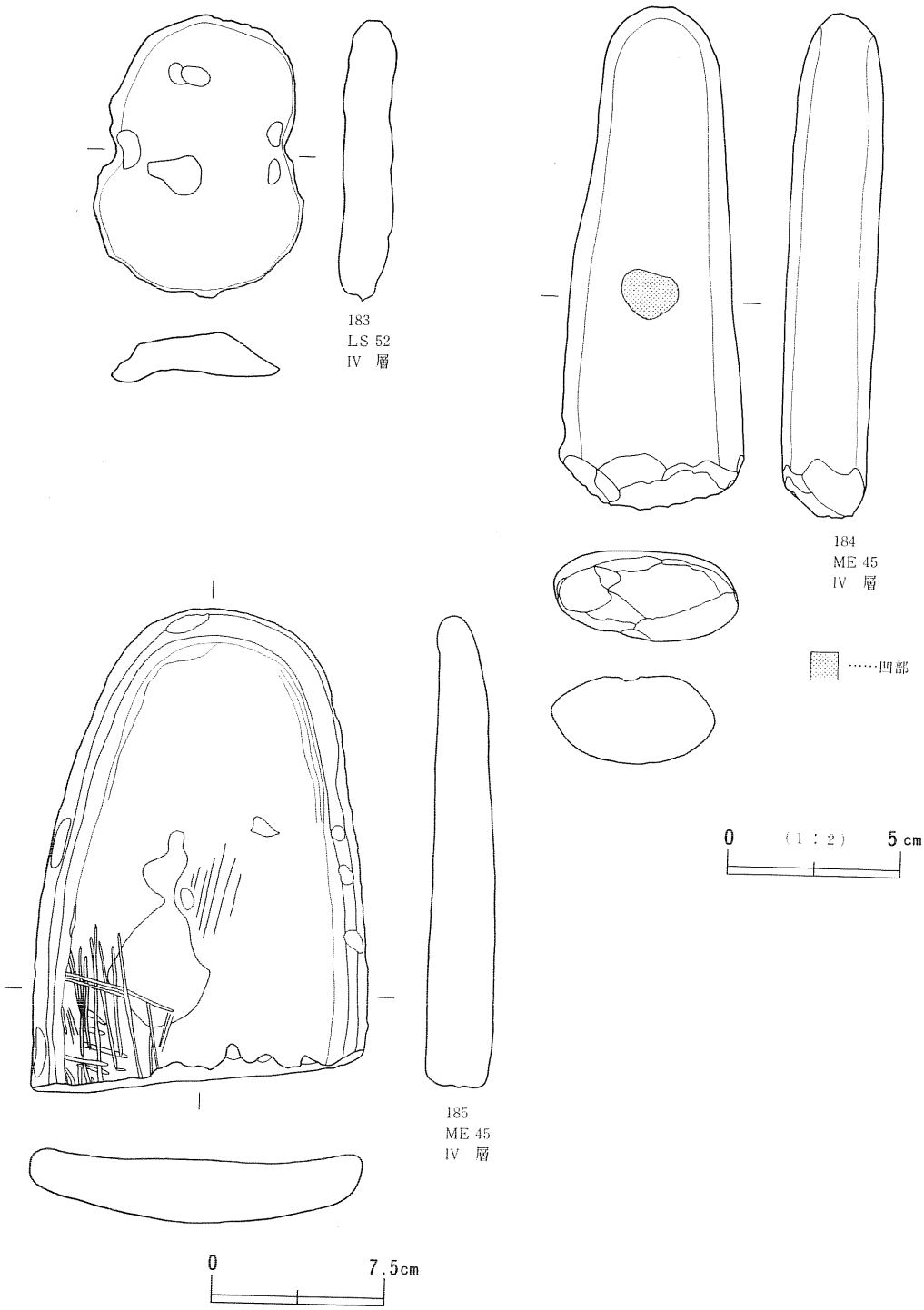
石皿（185）　長辺に平行な方向に使用痕が認められる。石質は、凝灰岩である。



第38図　遺構外出土石器 (1)



第39図　遺構外出土石器 (2)



第40図　遺構外出土石器 (3)

第5章　まとめ

今回の調査は、東に中山沢を臨む台地の、縁辺から台地の奥にかけての細長い範囲が対象であった。遺構は、台地の縁辺に主に検出され、台地の奥側には検出されなかった。第４章の土坑の項において述べたように、台地縁辺に営まれた遺構の分布には偏りが認められ、ａとｂ、２地点に分けられる。ａとｂの間には、地形上１～1.8mの段差が認められる。ちょうどＳＩ15のあたりに段差があり、ｂ地点のほうが一段低いテラス状となっている。ここでは、ａとｂ両地点ごとに検出された遺構について、若干触れてまとめとしたい。

ａ地点では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、立石遺構等が検出されている。竪穴住居跡のうち、全体を調査できたのは、石囲いの複式炉をもつ縄文中期と考えられるものである。この住居跡の南西の壁に、ほとんど接するように立石遺構が位置している。

ところで、長野県八ヶ岳山麓の中期の住居跡では、入口を入った正面に炉があり、その奥に立石を配することが知られている。また、本遺跡の西約１kmにある本道端遺跡のＳＩ10及びＳＩ11の各竪穴住居跡においても、炉の近くから立石や立てていたと推測される石棒が検出されている。これらの例から、立石と炉は密接な関係にあることが窺われる。

本遺跡例をみる限りでは、立石遺構と炉の関係を積極的に肯定できる資料に乏しいものと言わざるを得ない。今回検出された立石遺構の類例を他に求めると、鹿角市高屋館跡の立石遺構が該当する。高屋館跡の調査では、立石遺構が配石遺構・掘立柱建物跡等とともに後期の墓域を構成していたと考えられている。したがって、立石遺構をＳＢ33とした後期の掘立柱建物跡との関連で捉えるほうが妥当と思われる。このことは、本遺跡の性格を直ちに墓域とするものではない。

ｂ地点では、主に後期の竪穴住居跡が検出されている。このうちＳＩ15とした住居跡では、周堤と考えられる礫群が帯状に認められた。調査区の地山には、礫が多量に含まれていることから、竪穴住居を掘る時に出た土や礫をまわりに盛り上げたものと推測される。

竪穴住居跡の周囲の礫群の存在から、周堤を確認している遺跡としては、小坂町はりま館遺跡をあげることができる。ＳＩ152とした縄文前期と思われる大型の竪穴住居跡を、礫群がドーナツ状に取り囲むように検出されている。

（参考文献）

金関　恕「7　呪術と祭」『岩波講座　日本考古学　4　集落と祭祀』岩波書店　1986（昭和61年）

比内町教育委員会『本道端遺跡』比内町埋蔵文化財調査報告書　1986（昭和61年）

水野正好「講演　ストーンサークルの謎」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　第7号』秋田県埋蔵文化財センター　1992（平成4年）

秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ—高屋館跡—』秋田県文化財調査報告書第198集　1990（平成2年）

秋田県教育委員会『はりま館遺跡発掘調査報告書（上巻）—東北自動車道小坂インターチェンジ建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第192集　1990（平成2年）

付　編

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1994年2月28日

1993年11月9日受領しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ^{14}C％を付記してあります。

記

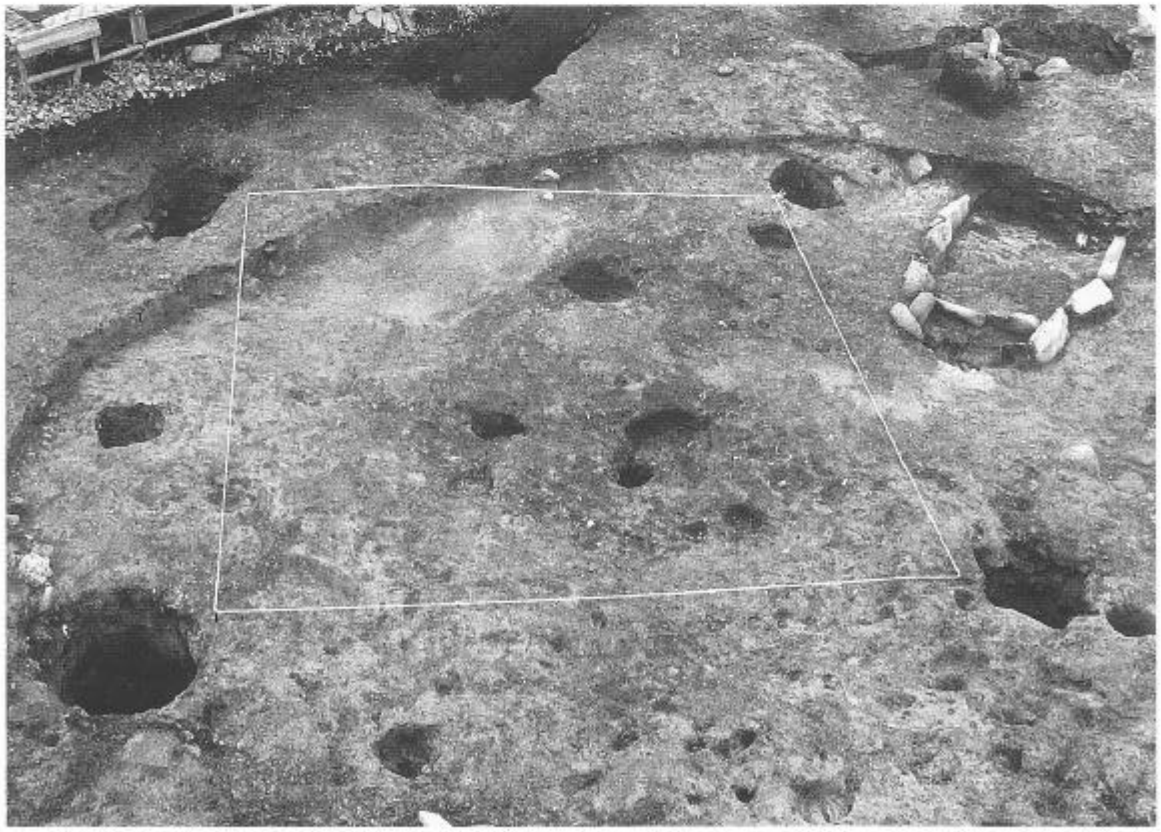
Code No,	試　料	年代（1950年よりの年数）
Gak-17573	炭化材 from 中山遺跡 No, 1　2NY　SI16	3410 ± 100 1460 B.C.
Gak-17574	炭化材 from 中山遺跡 No, 2　2NY　SI16	3480 ± 100 1530 B.C.

以　上

木越　邦彦

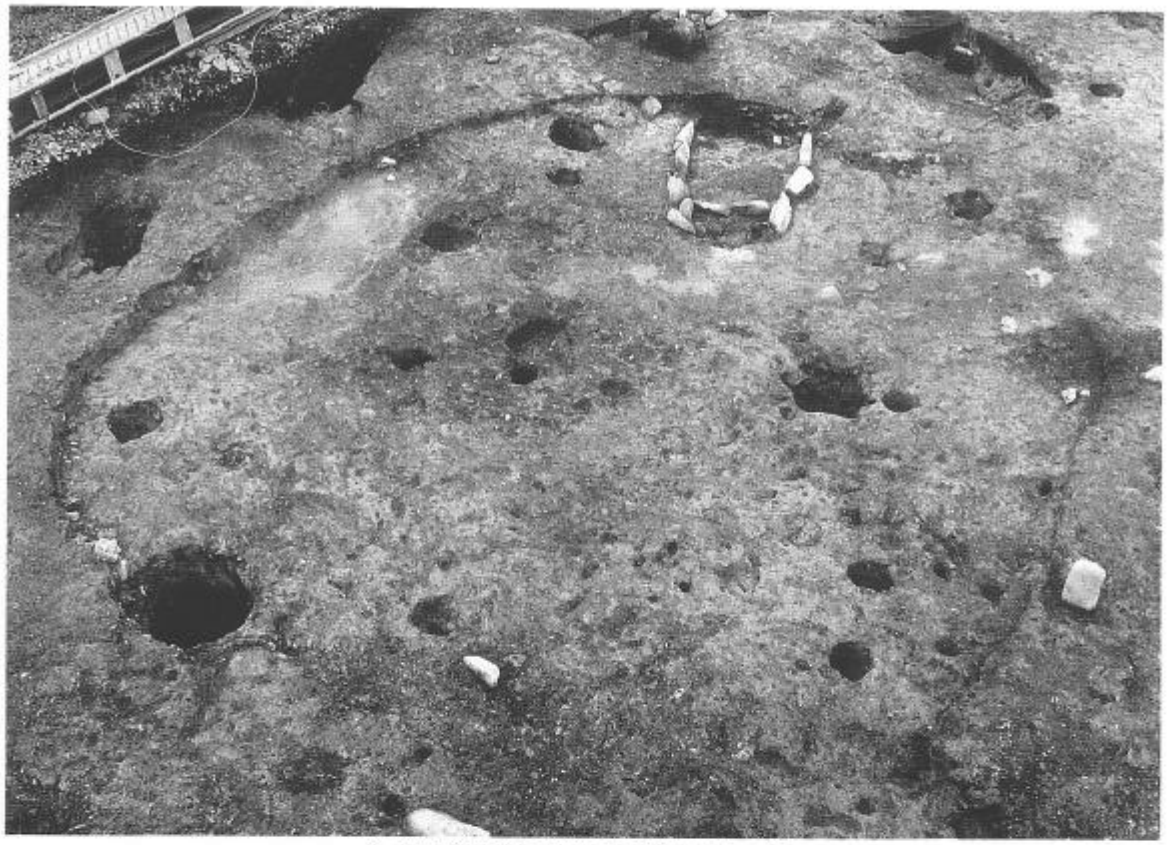
図版1

調査終了時の全景（北西→南東）

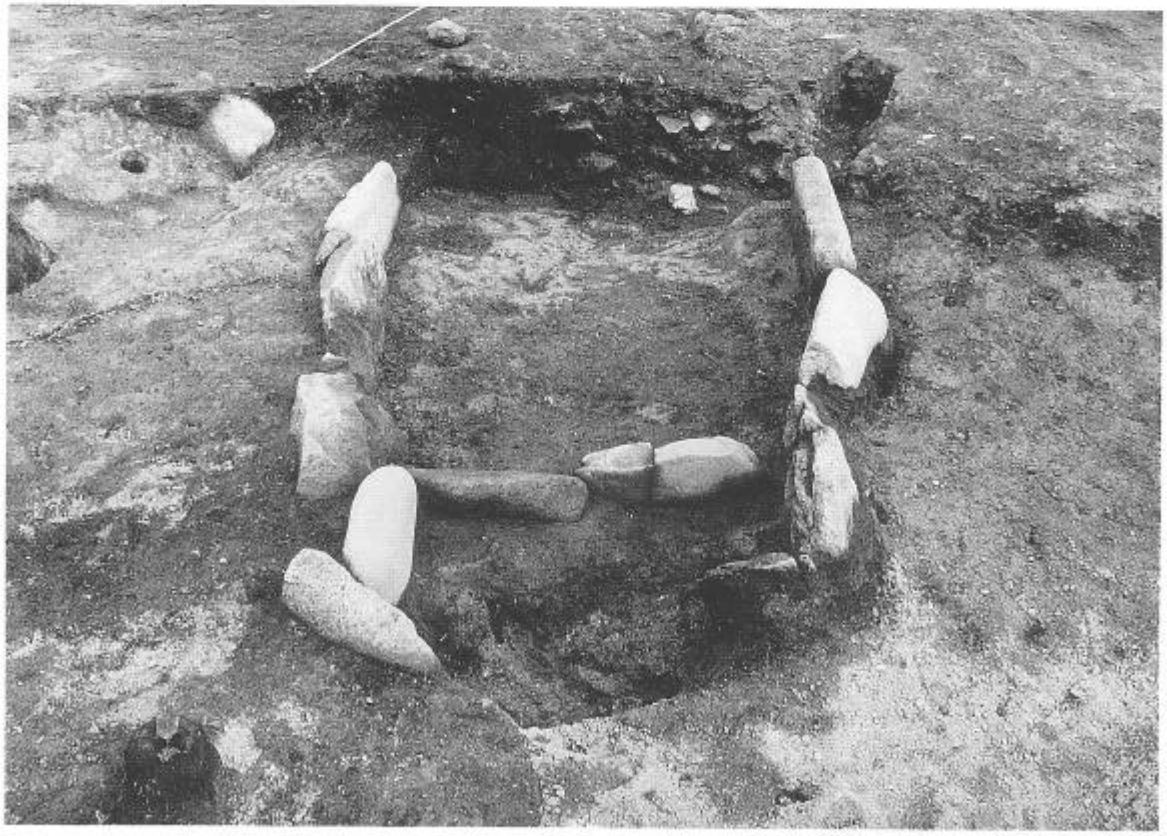


ＳＢ33掘立柱建物跡全景（西→東）

図版2



ＳＩ01竪穴住居跡完掘状況（西→東）



ＳＩ01竪穴住居跡石囲炉（北西→南東）

ＳＩ04竪穴住居跡完掘状況（南西→北東）

ＳＩ15竪穴住居跡検出状況（南東→北西）

図版4

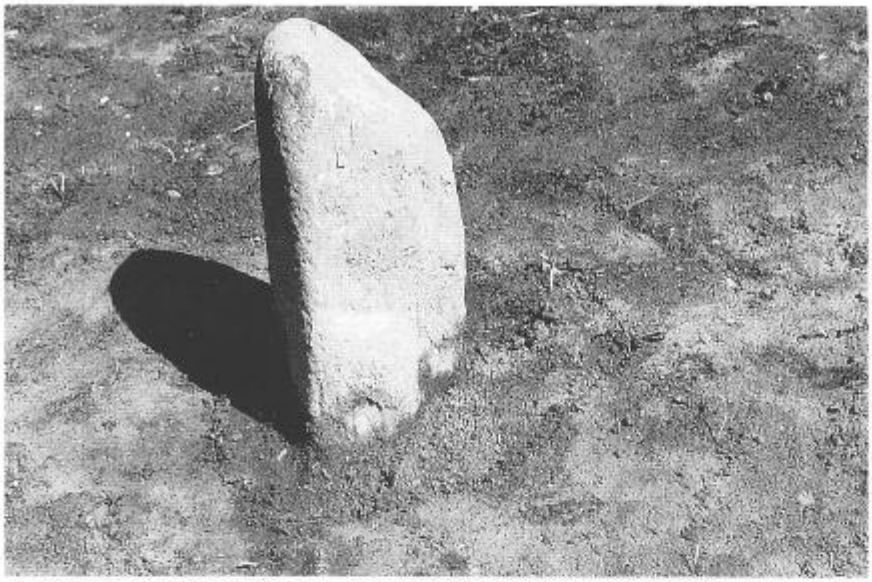
ＳＩ15竪穴住居跡完掘状況（南東→北西）

ＳＩ15竪穴住居跡遺物出土状況（東→西）

ＳＩ16竪穴住居跡完掘状況（北東→南西）

ＳＩ17竪穴住居跡焼土・炭化物出土状況（南西→北東）

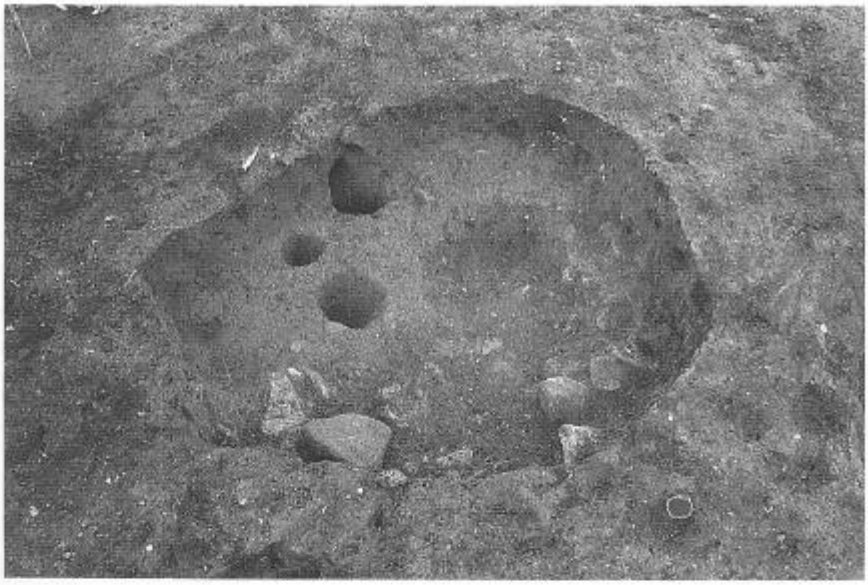
図版6



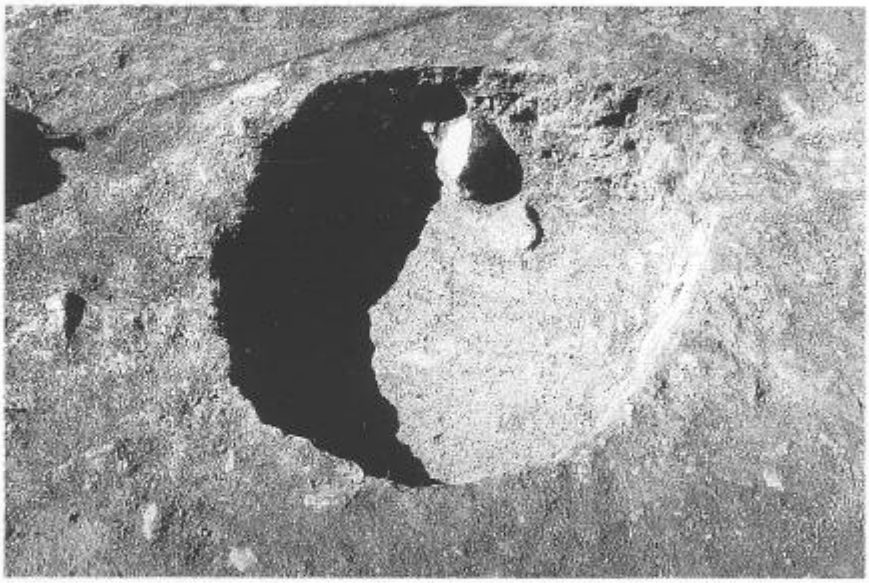
ＳＺ14立石遺構
検出状況（南西→北東）

ＳＫ10土坑
完掘状況（南東→北西）

ＳＫ12土坑
完掘状況（南→北）



ＳＫ19土坑
完掘状況（南東→北西）



ＳＫ26土坑
完掘状況（南東→北西）

ＳＫ30土坑
完掘状況（東→西）

図版8

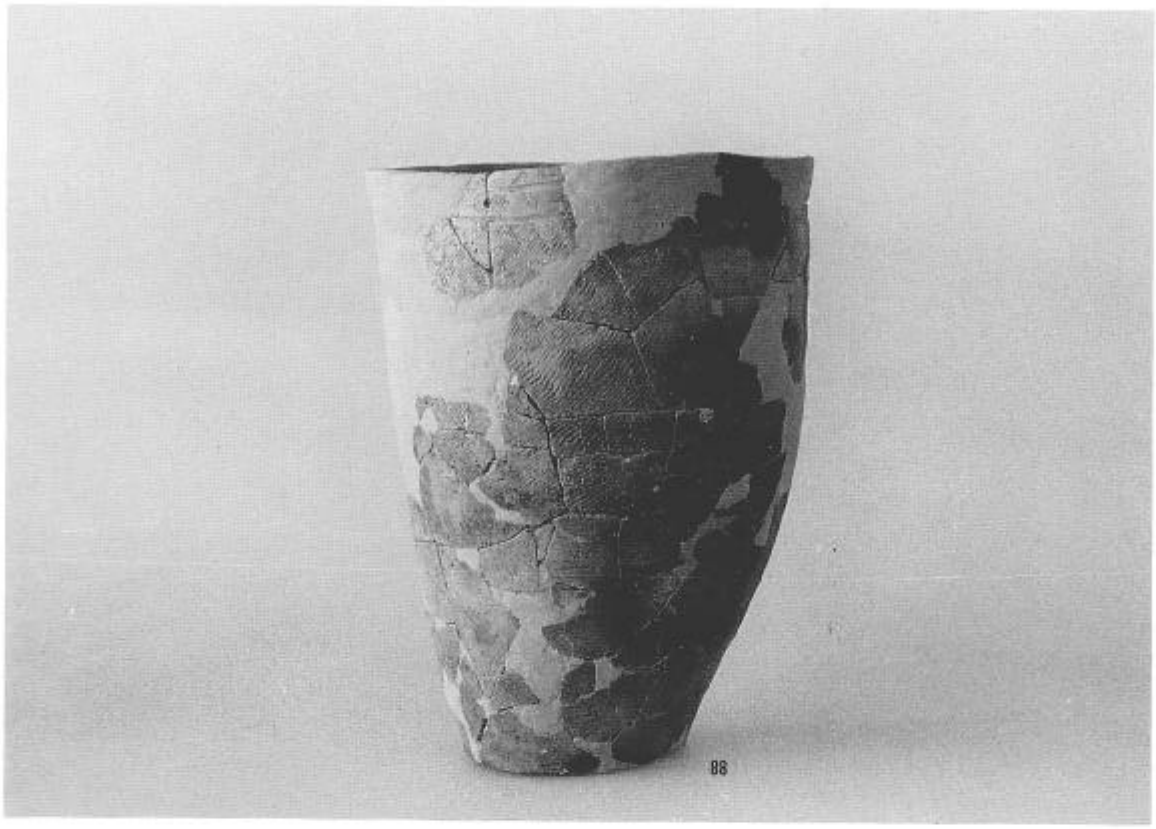
ＳＤ18溝状遺構完掘状況（南→北）

ＳＩ15竪穴住居跡遺物出土状況（南→北）

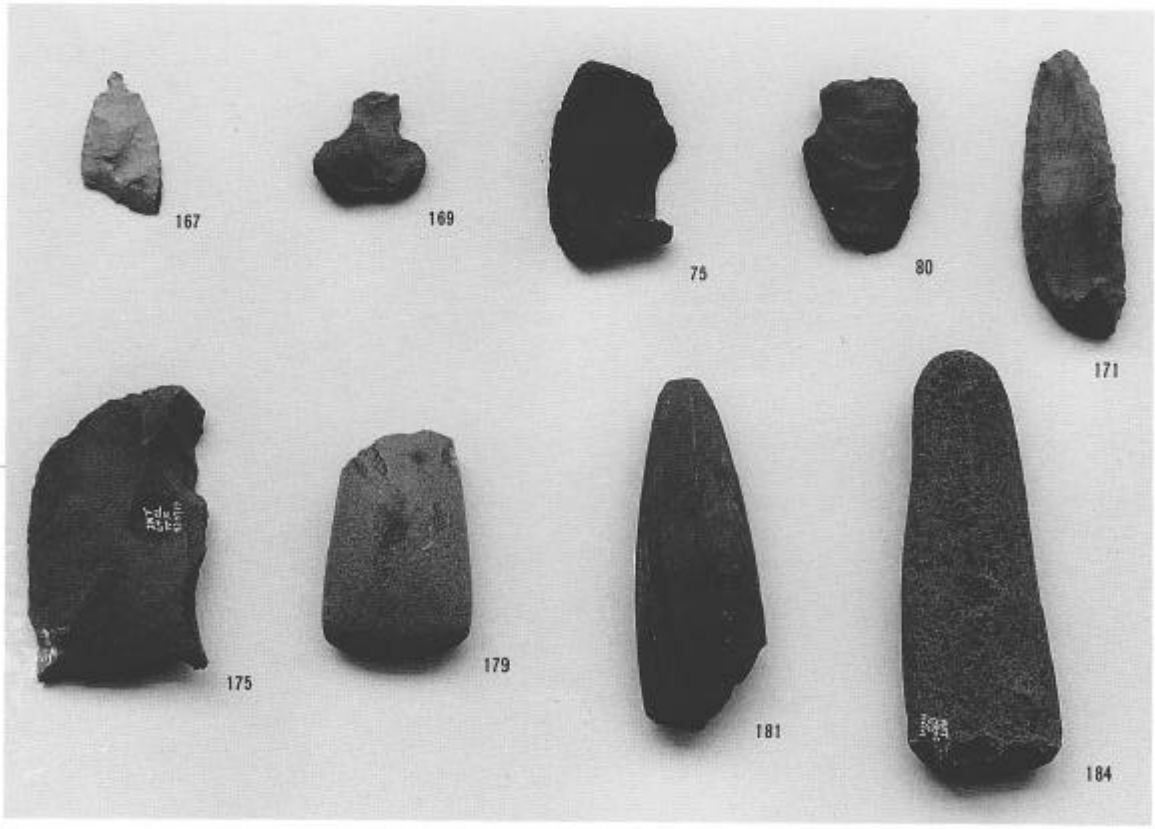
ＳＩ01竪穴住居跡出土土器

ＳＩ15竪穴住居跡出土土器

図版10



ＭＥ45グリッドⅣ層出土土器



出　土　石　器